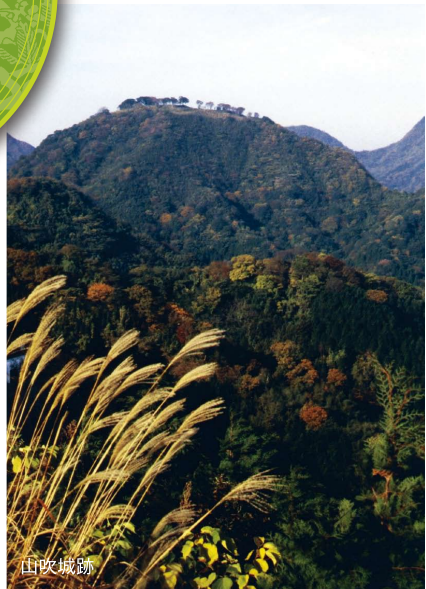


山陰の城館跡

改訂版

～攻防の跡をたずねて～



山吹城跡



松江城



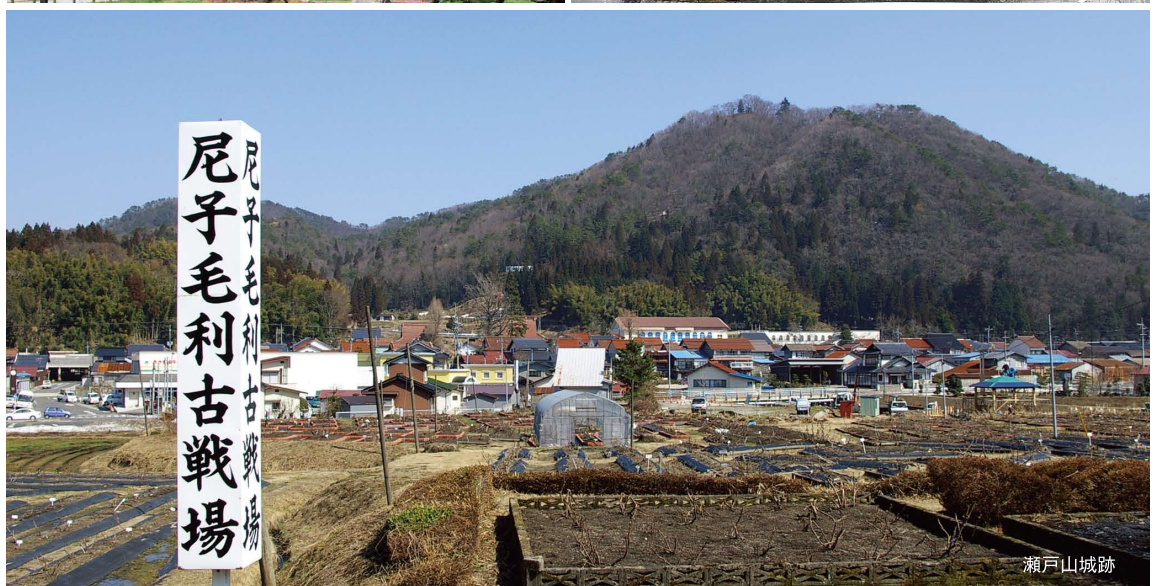
鳥取藩台場跡(由良台場跡)



鳥取城(明治10年頃)



米子城跡(四重櫓)



瀬戸山城跡

史跡整備ネットワーク会議
事務局

発行:2021年1月

島根県教育庁文化財課 〒690-8502 島根県松江市殿町1番地
TEL.0852-22-5880 FAX.0852-22-5794
鳥取県地域づくり推進部文化財局 〒680-8570 鳥取県鳥取市東町1丁目220
とっとり弥生の王国推進課 TEL.0857-26-7932 FAX.0857-26-8128

山陰史跡整備ネットワーク会議

検索

史跡整備ネットワーク会議



こちらからPDF版を
ダウンロードできます。

山陰の城館跡

～攻防の跡をたずねて～

はじめに

山陰両県の城館といえば、雄壮な天守閣をもつ国宝・松江城を代表する各地の江戸時代の城が知られています。城館跡は、鳥取県で495(因幡287、伯耆208)、島根県で1097(出雲581、石見497、隠岐19)ありますが、そのほとんどは戦国時代以前の山城です。山城の多くは天然の地形を利用し、曲輪や堀切、竪堀、土塁などの防御施設が設けられました。戦乱の中で築かれた山城を中心に、山陰の城の歴史をたどってみましょう。(城館跡の数は、平成18年の調査のものです。)

西暦年	元 号	出 来 事
1333	元弘3年	後醍醐天皇が隠岐を脱出し、伯耆国船上山に迎えられる。鎌倉幕府が滅ぶ。
1334	建武元年	建武の新政が始まる。
1336	建武3年	後醍醐天皇が吉野へ移り、南北朝時代が始まる。
1349	貞和5年	足利直冬が中国地方へ赴き、以後、反足利尊氏方として転戦する。
1391	明德2年	明德の乱が起き、山名氏が一時衰える。翌年、南北朝の合一となる。
1467	応仁元年	応仁・文明の乱が始まり、山陰各地でも戦いが起こる。
1521	大永年間	尼子経久は出雲平定後、伯耆・石見・安芸など周辺諸国へ侵攻する。
1531	享禄4年	石見銀山の争奪戦が始まり、1562年に毛利氏が領有するまで続く。
1541	天文10年	尼子晴久(詮久)は前年から毛利氏の吉田郡山城を攻撃するが、敗れて退却する。
1543	天文12年	大内義隆は前年から尼子氏の富田城を包囲するが、安芸・出雲の諸將の寝返りのため退却する。
1551	天文20年	陶晴賢(隆房)の謀叛により、大内義隆が自害する。
1562	永禄5年	毛利氏が石見銀山を領有して石見国を平定し、出雲国へ攻め込む。
1566	永禄9年	尼子義久が毛利元就に降伏し、富田城が落城する。
1568	永禄11年	織田信長が足利義昭を奉じて上洛。
1569	永禄12年	尼子勝久・山中鹿介(幸盛)らが隠岐国から出雲国に侵入するが、毛利氏に敗れて2年後に国外へ逃れる。
1573	元亀4年	室町幕府が滅亡。
1576	天正4年	毛利氏が尼子氏方の若桜鬼ヶ城を攻め落とし、因幡国を平定する。
1578	天正6年	播州上月城が落城し、尼子勝久は自害し山中鹿介(幸盛)も後に斬られる。
1581	天正9年	毛利氏方の吉川経家が立て籠もる鳥取城を、羽柴秀吉が包囲する。
1582	天正10年	本能寺の変。
1590	天正18年	豊臣秀吉が全国統一をなしとげる。 このころ石垣や天守閣など新しい技術が導入され、城の整備が進められる。
1600	慶長5年	関ヶ原の戦いで徳川氏が勝ち、大名の領地替えが行われる。
1603	慶長3年	江戸幕府の成立。
1615	元和元年	江戸幕府が発した一国一城令により、山陰各地で不要な城が破壊される。
	幕 末	山陰各地の沿岸沿いや港に、台場が築かれる。
1866	慶応2年	幕長戦争にて石見国が戦場となる。
1873	明治6年	明治政府が出した廃城令に基づき、山陰各地で天守閣などが破壊される。

CASTLE & MANSION in SAN-IN

1 山城の出現と展開

南北朝時代、山陰両県でも各地の領主が南北両朝に分かれ争う中で、険しい山に立てこもって敵を迎え撃つため、尾根を平らに削って造った山城が数多く築かれました。そのうちの一つが、隠岐を脱出した後醍醐天皇を伯耆の名和長年が迎え入れた、天然の要害ともいえる船上山でした。これらの山城は戦闘時のみ使われたと考えられています。

室町時代には、山名、京極、大内氏ら守護大名や多くの領主・土豪が、拠点となる城館を平時でも整備していきます。石見の益田氏の館である三宅御土居は、館の周囲に堀や土塁をめぐらせるなど防御性の高いものです。

2 山陰の戦国時代

戦国時代、出雲・隠岐では出雲国守護・京極氏の家臣だった尼子経久が京極氏に取って替わり、富田城を本拠に他国へも勢力を広げました。山名氏の力が衰えた因幡・伯耆や、周防・長門の大名大内氏の勢力下にあった石見も激しい戦いに巻き込まれ、各地の領主は、攻撃・防御により優れた仕組みを持つ山城を築きました。

大内氏と尼子氏を破った安芸の毛利氏は、山陰諸国を西から順に制圧していきます。その中で、水軍の城や輸送拠点の城、領主の拠点城を攻める際の陣城など、多様な城が戦況や地形に応じて築かれました。やがて因幡・伯耆では織田氏と毛利氏が戦い、毛利氏方の吉川経家は鳥取城に籠城しましたが、兵糧攻めにあい、陥落しました。

3 天下統一と城の終わり

豊臣秀吉や徳川家康による天下統一の時代、山陰諸国の城や館は大半が廃城となりました。残った城や新たに築かれた城は、広大な敷地・石垣・天守閣・城下町を備えた大名の居城として整備され、領国のシンボルとなります。

幕末、外国への防備として、山陰諸国の海岸沿いには台場が築かれます。明治維新後、大半の城では建物がこわれ、城はその役目を終えました。

おわりに

山陰両県に残る城館跡は、各時代・各地域の歴史の中で築かれてきました。この本では、山陰両県の山城を中心に、比較の見学が容易で代表的な城館跡を紹介しています。本書を片手に現地へ出かけていただき、当時の歴史に想いをはせていただければ幸いです。

Contents

01	島根県の城館跡	42	近世城郭と幕末の台場
22	山陰のお城分布MAP	44	用語解説
24	鳥取県の城館跡	45	参考文献、資料提供および協力機関

戦国時代の 激戦を伝える

益田氏・吉見氏ゆかりの城館群

石見西部では、周防の大名大内氏の強い影響下で、南北朝時代から益田・吉見・三隅・周布・永安氏らが時に戦いつつ、城を築き割拠していました。1551年に大内義隆が家臣陶晴賢に討たれると、陶氏方の益田氏と対立する吉見氏が争ったり、三隅・永安氏が滅ぶなど、1562年の毛利氏による石見平定まで緊張状態が続きました。

益田氏の歴史と石見

益田氏は石見国司を祖としており、南北朝時代を生きた11代兼見が三宅御土居を築いたといえます。

15代兼堯は、混乱した石見国内の領主達をまとめて国人一揆の盟主となる一方、雪舟を招くなど文化にも深い理解を示しました。20代元祥は、関ヶ原の合戦の後に益田を離れましたが、萩藩毛利家の家老となりました。



益田兼堯像(益田市蔵)

益田氏・吉見氏と関連する一族の城

津和野城は、もと吉見氏の居城で戦国時代には三本松城と言われ、近隣に築かれた下瀬山城や三之瀬城などの支城が一体となって防衛網を形成していました。陶晴賢は吉見氏を攻めた際に益田氏と連携してその連絡を絶ち、津和野城の近くに陣城を築いています。

江戸時代初めに津和野藩主となった坂崎直盛は、発達した鉄砲に備えて本格的に石垣を築くなど、津和野城の改修に力を注ぎました。坂崎氏断絶後、幕末まで藩主だった亀井氏は、引き続き城下町の整備を推し進めました。

益田氏・吉見氏と関連する一族の城

石見西部では、益田氏とその分家筋にあたる三隅・周布氏のほか、吉見・永安氏らによって、険しい地形を利用した山城が各地に築かれています。これらの城の特徴として、多くの城は斜面に堅堀を並べた連続堅堀が施されているという特徴が挙げられます。これらは、各地で起きていた激しい戦いを背景とする、石見西部の山城の特色と言えるでしょう。



益田氏・吉見氏ゆかりの城館群

国指定史跡

つわのじょうあと

津和野城跡 [吉見氏築城、坂崎氏、亀井氏の居城]

津和野町後田



空から見た津和野城跡と町並み
左山上に城の石垣がそびえ、城下を見下ろします。

中近世の町並みを見下ろす山城跡

津和野の市街を見下ろす標高367mの霊亀山上に築かれた山城です。

14世紀前半の築城以来、明治7年の城郭解体まで落城することのなかった名城です。

頂上近くまでリフトで上がることができ、山城としては見学しやすい城です。迫力のある石垣が山上に残り、本丸や出丸からの眺めは絶景です。

周辺には鷲原八幡宮、永明寺、藩校養老館、藩邸跡など多くの津和野城に関わる史跡・文化財があり、併せて見学することをおすすめします。



【交通】
JR津和野駅から車で5分。駐車場10台。
中国横断自動車道六日市ICから車で約45分。
駐車場から本丸までリフト約5分、徒歩約15分。

《津和野城の変遷と城の特徴》

津和野城は吉見氏14代319年間、坂崎氏1代16年間、亀井氏11代255年間の居城でした。吉見氏の築城は1295年頃より始まったといわれます。まずは南端の鷲原八幡宮裏手から始まり、やがては現在の本丸にまでいたって、西の山脈にも広がるT字形の堅固な城でした。近年の調査で、現リフト北側の山にも曲輪が広がっていることがわかりました。石垣で城を強化したのは関ヶ原合戦後に入城した坂崎出羽守直盛です。その後、基本的構造は亀井氏にも引き継がれ、全国にも希な近世の山城の姿を伝えています。

見どころガイド The key point



【本丸周辺】
本丸は最高所の三十間台と天守台、人質櫓跡からなっています。三十間台からの眺望は抜群。人質櫓跡の石垣は雄大です。また、最新のVR技術により再現された江戸時代の城を体験することもできます。

ます だ し じょうかんあと

益田氏城館跡 [大規模山城と居館がセットに]

益田市

中世の町並みに残る城館跡

山陰の最西端、益田市は中世には益田氏の城下町として発達し、現在もその面影を市内の各地に残しています。その益田氏が通常の住まいを置き、政治の拠点としたのが三宅御土居、軍事上の拠点としたのが七尾城です。城と居館の跡がともに良好に保存されている例は、全国的に見ても極めて珍しく貴重です。

市内には医光寺・万福寺・妙義寺・暁音寺・染羽天石勝神社などの寺社や益田氏ゆかりの雪舟に関わる美術品、中世の湊町の遺跡として国史跡となった中須東原遺跡など、中世をしのぶ様々な文化財が残っています。



三宅御土居想像図 発掘の成果や絵図などから復元された。(益田市提供)



【交通】

- 三宅御土居跡
JR益田駅から車で約5分。駐車場10台。
- 七尾城跡
JR益田駅から麓駐車場まで車で5分。駐車場10台。
麓から本丸まで徒歩で約15分。

三宅御土居跡

三宅御土居は、南北朝時代に益田氏11代兼見によって築かれたといわれます。七尾城とは益田川を隔てた対岸に築かれており、益田川を利用した物資の流通を押さえる重要な場所に築かれています。

絵図や古地図の分析に発掘調査の成果を重ね合わせると、周囲を堀で囲まれた長靴形の館であったと考えられます。堀を除いた敷地は、東西で最大190m、南北で最大110mもあり、戦国時代の通常の館よりも大きな規模です。

敷地の東西には土塁が築造当時と大きく変わることなく残されており、高さ5mと見上げるほどのものです。

発掘調査では12世紀から16世紀にかけて、建物が繰り返し建てられたことがわかっており、木組みや石組の井戸、鍛冶場跡なども見つかっています。保存状況は良好で、今後の調査でさらに館跡全体の様子が明らかになるものと期待されます。

見どころガイド The key point



【七尾城跡本丸】

北端の入り口には瓦葺きの門が、南端には御殿跡があったことが発掘調査でわかりました。城主が一定期間、城に居住したことを示す、希な事例といえます。

【三宅御土居跡東土塁】
三宅御土居跡には、その東西に土塁が残されています。墓地で利用されて形が変わった部分もありますが、長さ90mにも及び、当時の広大な館を思わせるのに十分な迫力があります。



【七尾城跡二の段】

本丸の北側に広がる平坦面です。発掘調査により、北端に2棟の建物跡と庭園跡が発見されました。

【医光寺総門】
県指定文化財の医光寺総門は、かつての七尾城の大手門を移築したものと伝えられています。

七尾城跡

益田平野に面し、益田川に突き出してそびえる七尾山(118m)に築かれた益田氏の本拠の城です。全長600mの大規模な城で、様々な遺構が良好に保存されています。

頂上の本丸から北に向かって2筋に分かれる尾根上を中心に、40あまりの郭や堀切が作られ、土塁や井戸跡なども見ることができます。

大手(城の正面)は医光寺の真向かいに当たる北向きの谷間と考えられ、大手門は医光寺に移築されたと伝えられます。西側の山裾には、堀の名残と考えられる花菖蒲園の池があります。

本丸跡や二の段付近は発掘調査も実施され、櫓門や御殿の跡と考えられる建物跡などが見つかっています。当城は、三宅御土居跡とともに、日本遺産「中世日本の傑作益田を味わう」の構成文化財となっています。



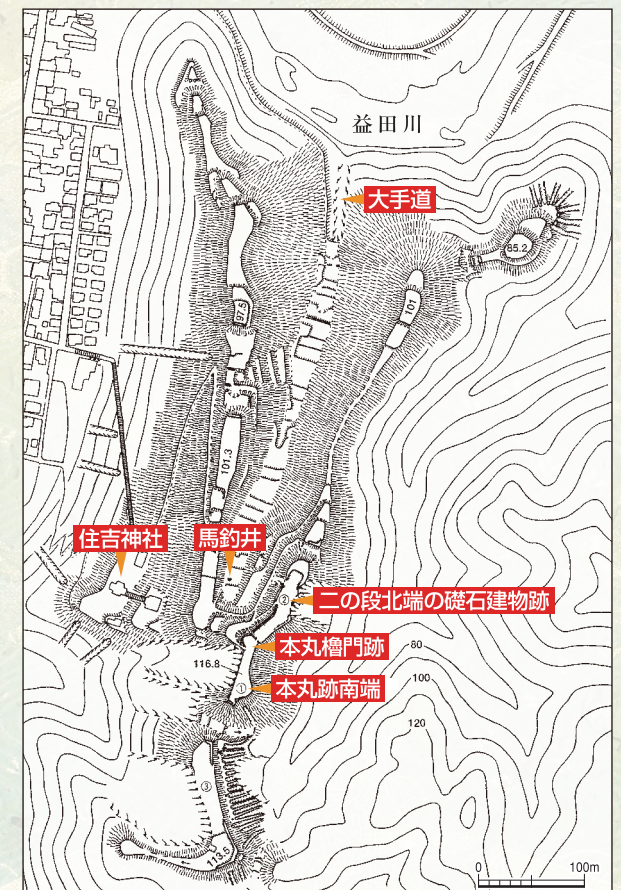
二の段北端の礎石建物跡
発掘で検出された礎石建物跡。



本丸櫓門想像図(益田市提供)
本丸で見つかった礎石建物跡から復元した図です。



本丸跡南端
発掘で礎石や多くの遺物が出土。御殿跡か。



益田氏・吉見氏ゆかりの城館群

たかじょうあと 高城跡

【三隅氏の本拠地】 浜田市三隅町三隅

石見中央部の雄、三隅氏の居城で石見を代表する中世山城の1つです。三隅市街地の東にそびえる高城山(362m)に築かれ、南北朝期や戦国末期には激しい攻防戦が繰り広げられたといわれます。山頂部には200mに及ぶ郭群が見られ、広大な城であったことがうかがえます。

【交通】三隅ICから車で約15分。駐車スペース若干あり。



市指定史跡

とびのすじょうあと 鳶巣城跡

【周布氏の本拠地】 浜田市周布町

5代益田兼季の次男、兼定を初代とする周布氏の居城。周布川と周布平野を一望に見下ろす標高88mの鳶巣山に築かれました。頂上に檜台上の主郭があり、周囲には曲輪や堀切、連続堅堀が見られます。麓の聖徳寺は周布氏の菩提寺と伝えられ、周布氏の墓と伝えられる石塔群も残っています。

【交通】JR周布駅から徒歩で約15分。



町指定史跡

しもせやまじょうあと 下瀬山城跡

【吉見氏重臣下瀬氏の拠点】 津和野町河村

高津川を眼下に見下ろす急峻な山上に築かれています。吉見氏の重臣、下瀬氏の居城で、16世紀半ばには陶氏方の益田氏から攻撃を受けましたが、それをしのいだといわれます。頂上には広い平坦地があり、建物跡とされる石列が残っています。

【交通】「道の駅シルクウェイにちはら」から車で約15分。



町指定史跡

よつやまじょうあと 四ツ山城跡

【4つの山が並立】 益田市美都町朝倉

その名の通り、標高230mほどのほぼ同じ高さの独立丘陵頂上に、それぞれ郭が築かれています。古くは益田氏ゆかりの地だったといわれますが、戦国末期には三隅氏の手に帰し、その家臣の須懸氏が城主となったといわれます。一番東の郭が最も大規模で、その北には連続して堀切が作られています。

【交通】JR益田駅から中腹まで車で約15分。駐車スペース若干あり。中腹から本丸まで徒歩約5分。



町指定史跡

さんのせじょうあと 三之瀬城跡

【吉見氏の拠点】 吉賀町

周防と津和野を結ぶ交通の要所に位置します。小規模ですが、堀切、土塁、堅堀が良く残っています。16世紀半ばに陶氏の攻撃を受けましたが、城主齋藤氏がしのいだといわれます。

【交通】「道の駅かきのきむら」から車で約10分。



やがけじょうあと 矢懸城跡

【永安氏の拠点】 浜田市弥栄町

長安本郷を一望に見渡す絶好の地に築かれた永安氏の在地支配の拠点。永安氏は戦国期には益田氏にしたがって陶氏方につき、16世紀半ばには毛利氏方の攻撃を受けて落城したといわれます。

【交通】弥栄支所バス停より徒歩約10分。



領有をめぐる 激戦の地

石見銀山攻防の城館群

島根県のほぼ中央にある石見銀山は、16世紀前半に本格的な開発が始まったといえます。莫大な銀を産出する石見銀山は遠く海外までその名が知られていたため、尼子氏・大内氏・毛利氏ら戦国大名の間で争奪戦が繰り広げられました。山吹城をはじめとする多くの城が石見銀山一帯に築かれ、長い間戦いの舞台となりました。

石見東部の国人達

険しい山なみが海岸近くから続く石見東部では、海岸や江の川沿い、山間の盆地に領主が城を築いていました。江の川上流域では、出羽氏・口羽氏を従えていた高橋氏は隣国安芸にも勢力を持つ領主でしたが、毛利氏に滅ぼされています。江の川中流域の佐波氏や小笠原氏は石見銀山方面へ勢力を伸ばしました。石見銀山周辺には温泉氏・石見吉川氏らが、江の川下流域には福屋氏らがいました。

石見銀山領有をめぐる戦い

周防の大内氏、出雲の尼子氏は、石見銀山の領有をめぐる激しく戦い、石見東部へ戦いは広がりました。大内義隆が倒れた1551年以降は、福屋氏・佐波氏と結んだ毛利氏と、温泉氏・小笠原氏を味方にした尼子氏が争います。小笠原氏の降伏、福屋氏の寝返りと滅亡を経て、尼子氏方山吹城將本城常光の降伏、温泉氏の退去により、1562年、毛利氏が石見銀山を手に入れました。

石見銀山周辺の城

石見地方東部にある南北朝時代の城館には、険しい地形を活かすつもはっきりした普請の跡が見受けられない特徴があります。その後、毛利氏方の領主の居城、石見吉川氏の物不言城、佐波氏の青杉ヶ城、出羽氏の二ツ山城、口羽氏の琵琶甲城では、戦国時代に改修が行われました。石見銀山をめぐる戦いなどにともない臨時に築かれた陣城(尼子陣所跡ほか)も、各地に残っています。

物不言城跡



尼子陣所跡



物不言城跡:城の北にある吉川氏菩提寺の浄光寺には、城主の吉川経安夫妻の墓があります。

尼子陣所跡:江の川に面した尾根の上には、たくさんの郭が残されています。



やまぶきじょうあと

山吹城跡

〔石見銀山支配の拠点〕

大田市大森町

国指定史跡



山吹城の歴史

山吹城は、莫大な富を生み出す銀山の守りの要として、戦国時代に山口の大内氏によって新たに築かれた山城です。

この頃銀山の支配をめぐって大内氏・尼子氏・毛利氏は激しく争い、山吹城を中心にした戦いは、1562年まで続きました。

その間幾度も改修を重ねられ、1560年に尼子の城将本城常光が攻め寄せた毛利氏の軍勢を退けるなど難攻不落の山城となりました。

その後毛利氏は山吹城を手に入れ、銀山支配の拠点としましたが、1600年の関ヶ原の戦いの後銀山周辺一帯が幕府直轄領となるとしだいに役目を終え、1600年代の前半には取り壊されたようです。

見どころガイド The key point



【西本寺の門】

山吹城の城門と伝えられ、山吹城跡にあった龍昌寺が大田市久利町に移った後に、西本寺に移築されました。江戸時代初期のものと思われ、大森で最古の建築物です。



【交通】仁摩・石見銀山ICから車で約10分(駐車場35台)。駐車場から山頂まで徒歩で約80分。

《山吹城跡の特徴》

山吹城跡は独立した急峻な山に築かれており、山頂には北に4段、南に3段の郭が造られています。山頂中央の主郭の規模は、南北52m、東西33mもあり、建物の礎石や櫓台も確認できます。主郭北側の郭には虎口や石垣が、主郭の南側には堀切が造られています。さらに、山頂の南の位置には19本もの縦堀が掘られています。これらの施設の配置は近世初頭の城郭を思わせるものです。また、山吹城跡は立地から周囲の眺望が非常に良いのも大きな特徴です。

石見銀山攻防の城館群

大森の町並み

大森は鉱山に隣接して発展した町で、江戸時代には幕府直轄地の中心地でした。武家・商家の旧宅や、社寺などが混在してよく残っています。



山吹城跡から見た大森の町並み



北側の郭
石垣や虎口が良く残っています。



南端の郭から見た石見城跡
大森の町並みや日本海も見渡せます。



主郭南側の堀切
山頂部を分断する大規模な堀切です。

国指定史跡

うのまるじょうあと・くしやまじょうあと

鵜丸城跡・櫛山城跡 [沖泊・温泉津湾押さえの海城]

大田市温泉津町温泉津

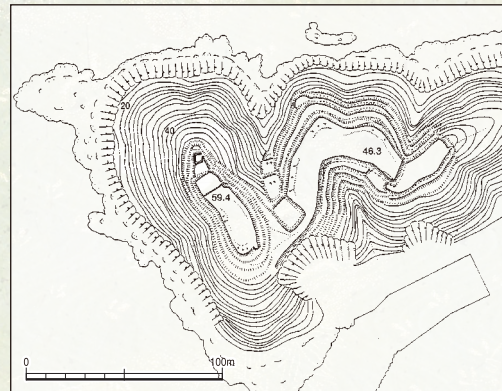
鵜丸城跡 ーうのまるじょうあとー

温泉津湾の湾頭に位置する山城。山陰における毛利水軍の基地であり、石見銀山で生産された銀の積出と銀山への物資搬入の拠点として栄えた沖泊・温泉津の警護のために、永禄13年(1570)、毛利元就・輝元によって築城されました。

沖泊港の南側の細長い尾根上に、東西ふたつの郭群で構成されています。東側の主郭は幅20～30m、長さ100mにわたり平坦面が続きます。沖泊湾に面した海岸の岩場には、軍船も繫留したと推定される鼻ぐり岩が存在します。関ヶ原合戦後、毛利氏の長門国萩への転封により廃城となりました。

【交通】

- 鵜丸城跡/湯里ICから沖泊まで車で約15分。沖泊から山頂まで徒歩で約10分。
- 櫛山城跡/湯里ICから沖泊まで車で約15分。沖泊から山頂まで徒歩で約20分。



櫛山城跡 ーくしやまじょうあとー

鵜丸城と沖泊湾を挟んで対峙する櫛島に築かれた海城です。標高40m弱の頂上部を利用して郭群が築かれており、特に沖泊港に面する南尾根に段状に竪土塁が存在します。もと温泉郷領主温泉氏の居城でしたが、毛利氏の時代に改修されたと考えられます。

弘安4年(1281)の元寇の時に築かれた「石見十八砦」のひとつとも伝えられています。

見どころガイド The key point



【鼻ぐり岩】

沖泊は自然の湾を利用したかつての港の様子がよく分かります。湾の兩岸の岩場には、船の綱を通すための穴を開けられた鼻ぐり岩がたくさん残っています。



国指定史跡

いわみじょうあと・やたきじょうあと・やはすじょうあと

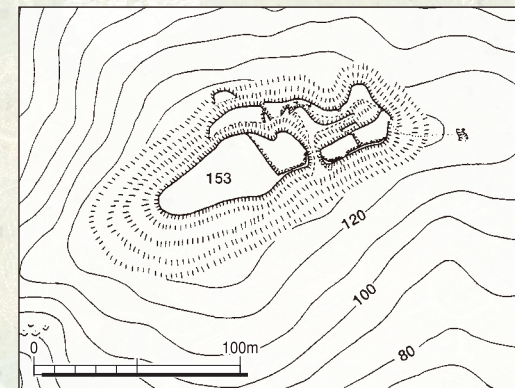
石見城跡・矢滝城跡・矢筈城跡 [石見銀山を守備した山城]

石見城跡 ーいわみじょうあとー

大田市仁摩町大田

銀山柵内北方の標高153mの岩山に築かれた山城です。南方の大田、柵内方面から仁摩へ向かう交通路を守備するための重要拠点で、近隣の領主温泉氏が軍事的拠点にしたとみられています。不定形な主郭から郭群と堀切が東側に伸びています。

【交通】仁摩・石見銀山ICから車で約5分。麓から徒歩で約20分。

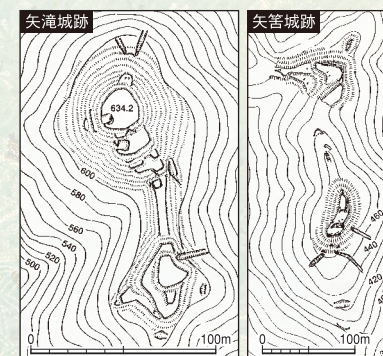


矢滝城跡・矢筈城跡 ーやたきじょうあと・やはすじょうあとー

大田市祖式町矢滝・大田市仁摩町大田

石見銀山街道温泉津沖泊道の降路坂を挟んで、北の尾根に矢筈城、南側尾根に矢滝城があり、ともに銀山柵内西方の出入り口を守備するための山城でした。矢滝城は、標高638mの頂上部に幾段かの郭と竪堀があります。『銀山旧記』には享禄元年(1528)大内義隆の築城と伝えられ、1531年には地元領主の小笠原氏が一時期ここを奪って銀山を支配したとの記録もみえます。

矢筈城は標高480mの尾根上に築かれた山城で、郭、土塁、石垣、竪堀、堀切などが良好な状態で残っています。記録によれば、矢筈城など銀山周辺の城で、銀山を巡り、尼子方と毛利方の激しい攻防があったとされます。



【交通】

- 矢滝城跡/仁摩・石見銀山ICから車で約15分、麓駐車場から徒歩で約60分。
- 矢筈城跡/仁摩・石見銀山ICから車で約15分、冠(かむり)集落の麓から徒歩で約60分。

まる やまじょうあと

丸山城跡 [小笠原氏の居城]

川本町三原

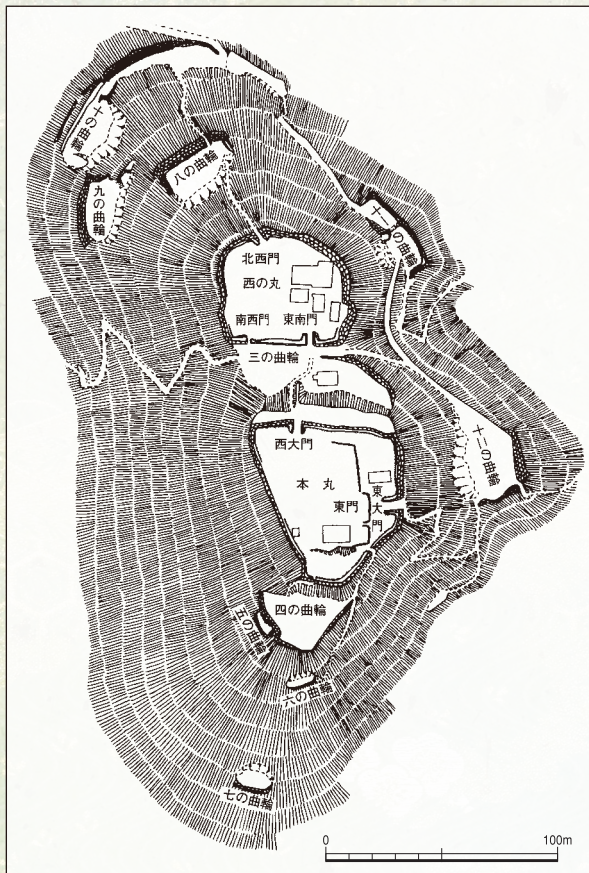


石見の有力な豪族である小笠原氏が天正年間に築いた山城で、銀山や江川にいたる交通の要衝に位置しています。

城郭は本丸と西の丸を中心に10あまりの郭群で構成され

ており、石見地方ではまれな石垣を伴っています。主郭には政庁が設けられ、西の丸には居館群が存在します。堀切や土塁等の防御機能がみられず、城よりも「山上の館」といってよい構造をもっています。このような例は全国的にもなく、中世末期の城郭の性格を知る上で重要な城跡です。

【交通】道の駅かわもとから車で約20分(駐車場10台)。駐車場から山頂まで徒歩30分。



見どころガイド The key point

【鼻ぐり岩】
本丸や周辺の郭では、石垣、出入り口、建物の基礎等を見ることができます。



三の輪建物跡



本丸東大門の石垣



本丸東大門

山頂付近に駐車場があり、近くまで車で行けます。眼下の眺望もすばらしいです。

石見銀山攻防の城館群

ものいわ す じょうあと

物不言城跡

大田市温泉津町福波

【秀吉と戦った吉川経家の居城】

戦国時代の終わり頃に吉川氏一族の吉川経家が拠点とした城です。標高約100mの尾根上には、約1,200m²の範囲で本丸、二の丸、三の丸が造られています。また、山麓には館跡が残っています。

1561年、毛利氏に反旗を翻した福屋隆兼が物不言城に攻め寄せましたが、吉川経家・経家親子の善戦で撃退されています。1581年、物不言城主となっていた経家は、中国地方へ侵攻した羽柴秀吉を迎え撃つため、ここから鳥取城へ向かいました。

【交通】石見福光ICから車で約10分。麓から徒歩で約10分。



ほんみょうじょうあと

本明城跡

江津市
有福温泉町本明

【石央の強豪福屋氏の本拠地】

城主は益田氏一族福屋氏で、隆兼の時代には現在の江津市南部を中心に、浜田市、邑南町にも勢力を拡大しました。その後、毛利氏の大攻勢により福屋氏は滅亡し、出雲に逃れたとされています。標高417m、比高約300mの山頂と尾根づたいに、たくさん郭が造られています。また、麓の福田八幡宮周辺は、福屋氏が居住した所と伝えられ、「土居」、「城内」の地名が残っています。



【交通】江津道路江津西ICより車で約15分。山頂まで徒歩約60分。

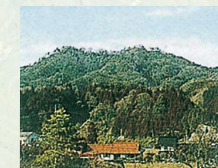
ふたつ やまじょうあと

二ツ山城跡

邑南町鱒淵

【鎌倉時代から続く古城】

標高530mの二ツ山山頂に築かれた山城で、東西二つの最高所を中心に、郭・土塁・石積・堀切・堅堀が良好に残っています。城主の出羽氏は、1500年代終わり頃毛利氏から毛利元就の六男元俱を養子に迎えており、現在残っている遺構はその頃のものと思われます。



【交通】「道の駅瑞穂」から徒歩で30分。頂上付近に駐車場有り。

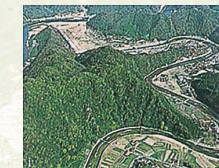
び わ こうじょうあと

琵琶甲城跡

邑南町下口羽

【石見銀山をにらむ毛利氏の前衛基地】

標高276mの龍尾山に築城され、郭・腰郭・土塁・石垣・虎口・堀切・堅堀・連続堅堀などがあります。付随して江川沿いの尾根に、西ノ原・松川砦といった、江川監視のための番城跡も残っています。城主は口羽通良(毛利氏御四人)、広通、通平、元通の四代で、約70年間居城しました。



【交通】口羽駅バス停から徒歩で約10分。

あおすぎ がじょうあと

青杉ヶ城跡

美郷町

【周りにも山城がたくさん】

江川に面した比高414mの急峻な山頂に築かれた山城で、南北朝時代に佐波氏の拠点でしたが、北朝の高師泰の攻撃によって落城しました。現在残っている虎口は、戦国時代に吉川氏が改修したものと思われます。

【交通】「浜原駅前」バス停から麓まで約20分。麓から山頂まで徒歩約2時間。



あま こ じんしよあと

尼子陣所跡

美郷町

【江川の橋頭堡】

美郷町都賀西は江川の重要な渡河地点で、江川西岸の山の上には平坦地が多数見られます。

1540年、安芸国の吉田郡山城攻めで敗れた尼子晴久は、この地で軍をまとめ撤退したと伝えられています。

【交通】道の駅「グリーンロード大和」から車で約5分(駐車場2台)。



尼子氏をめぐる攻防の城館群

応仁の乱の後、出雲・隠岐では室町時代の守護京極氏に替わり、戦国大名尼子氏が富田城を居城に領国を支配しました。富田城は、応仁の乱の際や大内・毛利氏の包囲戦、尼子勝久らの再興戦など、幾多の戦いの舞台となりました。尼子氏と毛利氏が激しく戦った出雲・隠岐の城館の多くは、尼子氏の滅亡でその役目を終えました。

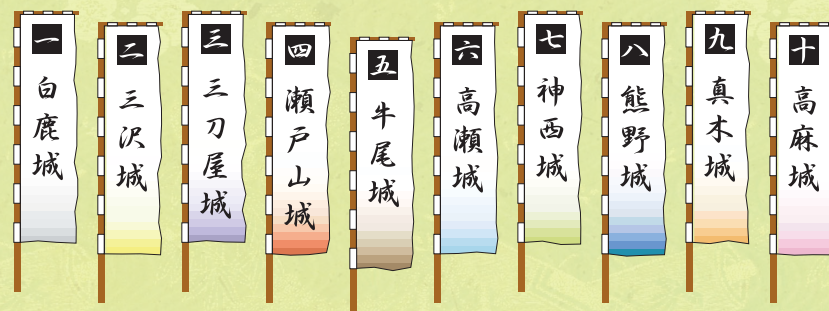
尼子氏の歴史



尼子氏は出雲守護京極氏の一族で、経久は出雲国を支配し戦国大名となり、孫の晴久にかけての最盛期には周辺諸国へ勢力を広げました。1566年、晴久の子義久は毛利元就に降伏しますが、一門勝久と山中鹿介幸盛らの再興戦は、出雲・因幡を経て1578年の播磨上月城の開城まで続きました。

出雲を代表する10の城

江戸時代に記された『雲陽軍実記』には、「出雲一国の十旗」として下図の10城が挙げられており、「尼子十旗」の城と呼んでいます。これらは、松田・三沢・三刀屋・赤穴氏ら有力領主の居城のほか、高瀬城・熊野城といった尼子氏再興戦の舞台となった城など、歴史的な特色が豊かな城ばかりです。



くまのじょうあと 熊野城跡

山頂から残る郭群を中心に、尼子氏の築城技術を良く残しています。



松江市

たかさじょうあと 高麻城跡

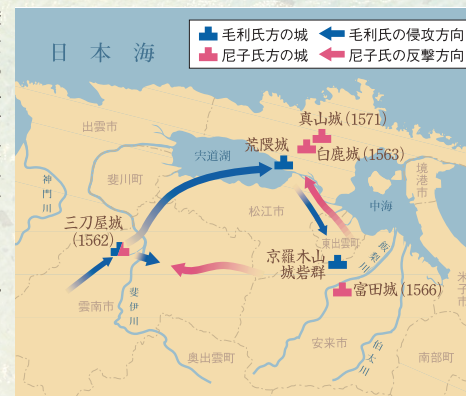
尼子氏の家臣が多いた大原郡の要となる城です。



雲南市

毛利氏との激戦

尼子氏は、富田城・安芸の吉田郡山城や、近隣諸国で大内氏や毛利氏と戦っています。のちに大内氏を滅ぼした毛利氏は、1562年に三刀屋城へ攻め込みました。毛利氏は宍道湖岸の荒隈城から尼子氏の白鹿城を攻め、三刀屋尾崎城から宍道湖方面へ補給線を確保しました。尼子氏は各地で反撃しますが、白鹿城を失い、毛利氏は富田城近くに陣城を築きます。尼子氏は、富田城山麓や中海・伯耆西部で戦いますが、1566年、毛利氏に降伏しました。1569年、毛利氏と九州大友氏の戦争中、山中鹿介幸盛ら尼子氏の残党が真山城から出雲各地へ侵攻します。毛利氏は翌年に尼子氏を富田城近くで破り、翌々年に残党を真山城から退去させ、再び出雲国を平定しました。



と だ じょうあと

富田城跡 [尼子氏の本拠、中四国最大級の山城]

安来市広瀬町富田

国指定史跡

難攻不落の巨大山城

山を中心に、飯梨川に向かって馬蹄形に伸びる丘陵上の多数の防御施設を配した広大な山城です。戦国大名尼子氏の居城として、大内氏、毛利氏の攻撃にも力攻めでは落城しなかった難攻不落の山城です。

尼子氏滅亡後、毛利氏の後に城主となった吉川広家により、石垣を築き、瓦葺きの櫓等を築くなど、中世城郭から近世城郭へ大きく変貌を遂げました。その後城主となった堀尾氏が、江戸時代の初めに松江城を築城し本拠を移すまで、出雲国の中枢として栄えました。



【交通】
JR安来駅からバスで約20分、市立病院前下車。
麓まで徒歩約15分。
安来ICから車で約15分(駐車場20台)。
麓から本丸まで徒歩約30分。

見学コース

富田城満喫コース (見学時間を含めて2時間程度)



見

ところガイド The key point



【本丸・二ノ丸・三ノ丸】
月山山頂につくられた郭。山中御殿跡から七曲りと呼ばれる登山道を上がると、月山の頂部の三ノ丸に着きます。石垣に囲まれた郭で、礎石建物跡や掘立柱建物跡および堀切があります。なお、本丸の奥には勝日高守神社があります。



【山中御殿】
月山中腹にある周囲を石垣や土塁で囲まれた広い郭。北南には虎口が存在し、石垣の櫓台も残っています。また、発掘により建物跡や石段も認められました。



【花ノ壇】
山中御殿の手前がある石垣に囲まれた郭。発掘により2棟の掘立柱建物跡が発見されています。現在、その跡に休憩や管理のために建物が復元され、来訪者に開放されています。

尼子氏をめぐる攻防の城館群

安来市立歴史資料館

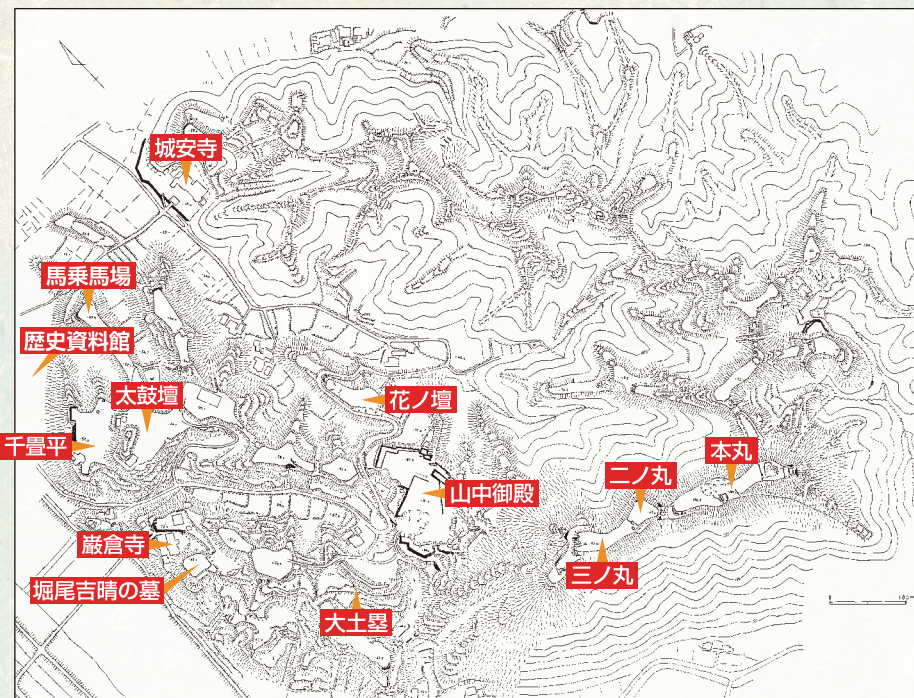


富田城跡の西麓にある資料館。富田城跡のジオラマ模型やその城下町である富田川河床遺跡から出土した、当時の生活用具が展示されています。

蔵倉寺



歴史資料館から少し上がった丘陵にある真言宗の古刹。
長い石段を登ると高い石垣が存在し、その上に本堂があります。
なお、境内の奥には堀尾吉晴の墓があり、大型の五輪塔が残っています。



三ノ丸からの景観



二ノ丸からの景観



県指定史跡

み ざわじょうあと

三沢城跡 [出雲最大の国人領主三沢氏の居城]

奥出雲町三沢

守り堅固な多郭式山城

斐伊川沿いの独立丘陵に築かれた三沢氏の山城です。三沢氏は、室町時代には、たたら製鉄の盛んな奥出雲の多くを領し、尼子氏を脅かす勢力をもっていました。

山全体が要害化されており、頂上部の本丸を中心に各尾根部に多くの郭が設けられ、堀切や土塁も部分的に見られます。標高419mの低い山にもかかわらず、眺望が良く、仁多郡の大部分が見渡せます。

【交通】松江自動車道三刀屋木次ICから車で約30分。駐車場から本丸まで徒歩で約15分。



見どころガイド The key point

【三澤池】

大手口より東側の尾根の「十兵衛垣」に進むと、刀を研いだと伝えられる小さな池があります。「若返りの水」ともい、島根の名水50選に入っています。



【大手口の石垣】
南側の正面からの登り口に、大手門に囲む大形の石積が残っています。

《三沢城跡とその周辺》

戦国時代には、奥出雲町横田の藤ヶ瀬城に移るまで、奥出雲の中心的な城でした。城下であった三沢の町には歴代城主が祈願した三澤神社や菩提寺とされる蔭涼寺があります。



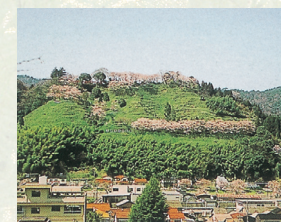
県指定史跡

み と や お さきじょうあと

三刀屋尾崎城跡 [出雲の中央部を押さえる]

雲南市三刀屋町古城

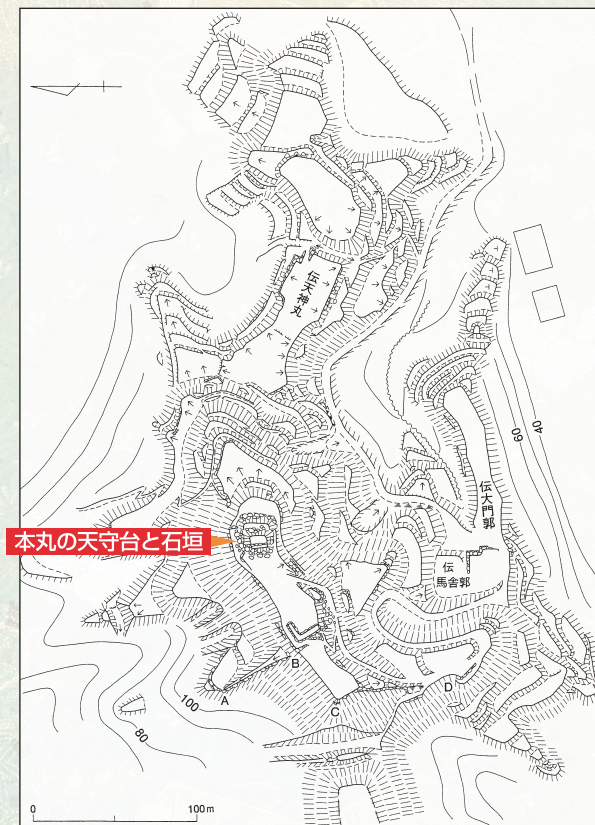
三刀屋川を見下ろす広い主郭



三刀伊川中流域で交通の要衝地にあたる三刀屋川沿いの低丘陵に築かれた山城です。三刀屋郷一帯を治めた三刀屋氏の居城で、もともとは、北側に位置する古城川奥の三刀屋じゃ山城跡が中心的な城でした。

しかし、戦国時代以降は尾崎と呼ばれる谷平野に面する現在の三刀屋城が居城となったと考えられます。今に残る石垣や天守台は関ヶ原戦後に出雲に入国した堀尾氏の時代に改修されたものと推定されます。なお、現在は公園として利用されています。

【交通】松江自動車道三刀屋木次ICから車で10分(駐車場あり乗用車のみ)。



見どころガイド The key point

【殿様墓】

谷を挟んだ東側丘陵部の松本古墳群の麓には同安寺跡があり、石屋形(石籠)に入った石塔(宝篋印塔)が墓石として残っています。城主であった三刀屋氏か、堀尾氏の墓と伝えられています。



【本丸の天守台と石垣】

最高所にあたる本丸の平坦地周辺部には低い石垣が残り、東端には石垣による天守台が残っています。これらは堀尾氏の時代に改修された遺構と推定されます。なお、西端には防御のための深い堀切が掘られています。

尼子氏をめぐる攻防の城館群

こ うの お じょうあと

国府尾城跡 [隠岐を制した隠岐氏の居城]

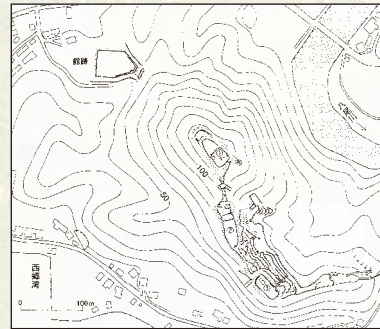
隠岐の島町港町

海に面した天然の要害

ほぼ独立丘陵に近い城山に築かれた城で、南は西郷湾の北岸に面し東側は八尾川に囲まれた天然の要害の地に築かれ、水運を意識した場所にあります。

隠岐の統一を成し遂げた隠岐氏の居城で、最高所に主郭と考えられる広い平坦面が築かれ、その他に広い面積を持つ郭が2つ見られます。麓には堀切と土塁に囲まれた居館跡が築かれています。

【交通】西郷港から登り口まで徒歩で約10分。
登り口から最高所まで徒歩で約15分。



市指定史跡

鷺ヶ巣城跡

出雲市
西林木町

[毛利氏 尼子攻略の拠点]

出雲平野の北方にそびえる北山山脈の鷺ヶ巣山に築かれた山城で、毛利元就が、出雲国の平野部へ侵入した時の拠点として最初に築いた山城です。

構造は頂部に設けられた主郭を中心に四方に延びる稜線上に郭を放射状に配置したもので、麓に向けても郭群が広がっています。宍道隆慶、政慶が城主だったと伝えられています。

【交通】一畑電鉄川跡駅から麓駐車場まで車で約5分。
麓駐車場から山頂まで徒歩で約40分。



白鹿城跡

松江市法吉町

[富田城防衛の第1の拠点]

松江市の北、北山山脈の白鹿山に築かれた「尼子十旗」の1つの城です。富田城防衛の最重要拠点として、島根半島と宍道湖・中海の水運を掌握するために重視されていました。

城主は尼子晴久の姉婿の松田誠保と伝えられ、尼子・毛利の激しい攻防戦の末に永禄6年(1563)に落城しました。文献から激しい銃撃戦が展開されたことが分かります。

【交通】JR松江駅から車で約20分。
山陰道松江西ICから車で約25分。
駐車場から本丸まで約20分。



たか せ じょうあと

高瀬城跡 [尼子氏最後の拠点]

出雲市斐川町

出雲市と雲南市の境の急峻な地形を利用した山城で、尼子氏復興戦時には、真山城と並んで最後の拠点として米原綱寛が籠城しました。

城は、豎堀と横堀や土塁を複雑に絡めた防御施設が北側の出雲平野側を中心に見られ、毛利氏との激戦の様子を窺うことができます。



【交通】山陰道宍道ICから駐車場まで車で約15分。



ふじ が せ じょうあと

藤ヶ瀬城跡 [尼子氏の代官所]

奥出雲町横田

奥出雲屈指の豪族である三沢氏一族の居城として戦国時代に築かれた山城です。最高所には櫓台と考えられる高台があり、一段下がった場所に主郭が設けられ、深い堀切によって遮断されています。主郭の西側には土塁を設けた郭がいくつも築かれています。

尼子氏によって落城後、代官が置かれた城でもあります。



【交通】JR出雲横田駅から徒歩で約30分。



きょうら ぎ さんじょうあと

京羅木山城跡

松江市東出雲町ほか

[富田城攻略の最前線]

毛利氏や大内氏による富田城包囲の拠点として築かれた城で、富田城側の尾根には、土塁のある広い郭や連続した堀切が見られます。

【交通】山陰道東出雲ICから出雲金刀比羅宮まで車で約10分。
駐車場から山頂まで徒歩で約50分。



じんざいじょうあと

神西城跡 [尼子氏石見への橋頭堡]

出雲市東神西町

中世の神門水海(現在の神西湖)に面する交通の要衝の地に築かれた神西氏の居城で、「尼子十旗」の1つ。最高所からは、神西湖・北山山脈などが一望できる良所です。

城は那賀佐神社裏山の最高所周辺に築かれた郭と東の九景川方向に派生する尾根上の郭から構成され、広い範囲で普請が行われています。



【交通】JR出雲神西から登山口まで徒歩で約30分。



せ と やまじょうあと

瀬戸山城跡 [国境の山城]

飯南町下赤名

別名衣掛城とも呼ばれ、出雲・石見・備後国の境にある要衝の地に築かれた城です。

戦国時代には、赤穴氏代々の居城でしたが、江戸時代になって堀尾氏によって大改修が行われ、総石垣の城郭に変わっています。至るところに石垣が残り、切石が敷かれた城門の跡も見られます。



【交通】道の駅赤来高原から登山口まで徒歩で約10分。



いん や じょうあと

因屋城跡

海士町海士

[村上氏の居館]

隠岐の海士町にある村上氏の館の背後にある城です。

城は、二重の堀切で遮断された尾根の先端に築かれ、二つの土塁を廻らした郭を見ることができます。

【交通】菱浦港から隠岐神社方面へ車で約10分(駐車場あり)。



- 02 益田氏・吉見氏ゆかりの城館群
 - 03 津和野城跡
 - 04 益田氏城館跡
 - 06 高城跡
 - 高城跡
 - 下瀬山城跡
 - 四ツ山城跡
 - 三之瀬城跡
 - 矢懸城跡
- 07 石見銀山攻防の城跡群
 - 08 山吹城跡
 - 10 鶴丸城跡・櫛山城跡
 - 11 石見城跡・矢瀧城跡・矢筈城跡
 - 12 丸山城跡
 - 13 物不言城跡
 - 本明城跡
 - 二ツ山城跡
 - 琵琶甲城跡
 - 青杉ヶ城跡
 - 尼子陣所跡
- 14 尼子氏をめぐる攻防の城館群
 - 16 富田城跡
 - 18 三沢城跡
 - 19 三刀屋尾崎城跡
 - 20 国府尾城跡
 - 鷹ヶ巣城跡
 - 白鹿城跡
 - 高瀬城跡
 - 21 神西城跡
 - 藤ヶ瀬城跡
 - 瀬戸山城跡
 - 京羅木山城跡
 - 因屋城跡
- 42 近世城郭と幕末の台場
 - 松江城



山陰のお城分布MAP



- 西伯耆における戦国争乱と城
 - 大山寺旧境内
 - 手間要害
 - 尾高城跡
 - 富長城跡
 - 岸本要害
 - 岩井垣城跡
 - 小松城跡
 - 江美城跡
 - 法勝寺城跡
 - 黒坂城跡
 - 俣野の土居城跡
 - 亀井山城跡
 - 湯谷城跡

- 東伯耆における栄枯盛衰
 - 田内城跡
 - 打吹城跡
 - 岩倉城跡
 - 羽衣石城跡
 - 河口城跡
 - 市場城跡
 - 棚下豪族居館跡
 - 八橋城跡

- 因幡の城をめぐる攻防
 - 若桜鬼ヶ城跡
 - 私都城跡
 - 隆平城跡
 - 景石城跡
 - 富貴谷城跡
 - 唐櫃城跡
 - 二上山城跡
 - 桐山城跡
 - 天神山城跡
 - 防己尾城跡
 - 鶴尾城跡
 - 勝山城跡
 - 鹿野城跡

- 近世城郭と幕末の台場
 - 鳥取藩台場跡
 - 鳥取城跡
 - 米子城跡

- 24 西伯耆における戦国争乱と城
- 25 東伯耆における栄枯盛衰
- 30 因幡の城をめぐる攻防
- 34 近世城郭と幕末の台場
- 42
- 43

たび重なる隣国
からの来襲

西伯耆における戦国争乱と城

伯耆の守護職は、山名時氏以降東伯耆を本拠地とした山名氏が代々継承していました。しかし、いわゆる応仁の乱の最中、文明3年(1471)の守護山名豊之の殺害を契機として、山名家中内部の分裂と有力国人層の台頭が起こり、周辺諸国をも巻き込んだ伯耆国の戦国争乱が幕を開けます。こうした混乱の中、16世紀に入ると、かつて「大永の五月崩れ」などと表現された出雲の尼子氏による伯耆進出が本格化します。尼子経久は反守護勢力を支援して伯耆守護山名氏を圧倒します。特に隣国との国境地域である日野郡は、鉄の産地であることから重要視され、日野衆と呼ばれる在地領主を傘下におさめ、主要な城には尼子直臣を派遣して直轄地としました。有力な国人領主がいなかった西伯耆は、尼子氏の強固な支配下におかれます。やがて毛利元就の中国地方における勢力拡大を受け、永禄5年(1562)に始まる月山富田城攻撃において、西伯耆は富田城包囲網の東側ラインとして重視され、尾高城、河岡城、江美城などで尼子・毛利の激しい争奪戦が行われます。やがて富田城落城とともに毛利氏の西伯耆支配は確立さ

れ、その中心となった尾高城は杉原盛重に委ねられます。しかし、永禄11年(1568)の毛利氏の九州出陣に際して伯耆の領主たちが九州に赴いた間隙を縫って尼子勝久・山中鹿之助による尼子再興戦が伯耆各地で繰り広げられます。その後、將軍足利義昭の備後頼への追放をきっかけに、毛利一織田の対立は決定的になり、天正8年(1580)には織田方についた東伯耆南条氏と西伯耆の諸将が合戦に及んでいますが、この頃になると主戦場は南条氏の拠る羽衣石城などの東伯耆や鳥取城のある因幡に移っていきました。その後、伯耆国内においては秀吉と毛利方で領地の確定が行われ、天正19年(1591)に西伯耆は毛利氏の一族吉川広家の領国となり、広家は米子城を築きます。関ヶ原の戦いの後、吉川氏は岩国に転封され、中村一忠が米子城を拠点に伯耆一国を統治することになります。しかし、中村氏は御家騒動で断絶、米子に加藤貞泰、黒坂に関一政が入りますが、やがて元和3年(1617)に因伯32万石池田氏の領地となり、家老に預けられた米子城を除いて西伯耆の城はすべて廃城となります。



西伯耆における戦国争乱と城

国指定史跡

だいせん じきゅうけいだい

大山寺旧境内 [僧兵を擁した山岳仏教の聖地]

大山町大山

阿弥陀堂 (重要文化財)



古くから信仰の地であった大山には多くの寺坊が建立され、近世には大山寺領三千石「一山三院四十二坊」と呼ばれるほどでした。中世以前、多数の僧兵を抱えていた大山寺は世俗世界においても一大勢力となっており、寺坊の実数はそれらを上回っていたと考えられます。現在も博労座周辺に展開する西明院、中門院、南光院の僧坊跡等に残る土塁や石垣は往時の面影を伝えています。船上山行宮跡(国史跡)も同様な土塁で囲まれた僧坊群です。こうした堅固な僧坊群は時に城郭の役割を果たしたと考えられます。

【交通】JR山陰本線の伯耆大山駅から車で約20分。中国横断自動車道米子ICから車で約15分。



見どころガイド The key point



【経悟院跡】
大山寺の旅籠街を抜けた辺りにある僧坊跡のひとつ。経悟院は元亀2年(1571)に末吉城の山中鹿之助と組んで、毛利氏と戦ったといわれる。

てまようがい

手間要害 [西伯耆の代表的山城]

南部町寺内



比高差300mの山間山頂から南北に降る尾根線に複数の郭群が展開する西伯耆の代表的な山城。山頂部の山間山地区には連続する11ヶ所の郭群があり、発掘調査により16世紀後半の遺物が出土しています。

もともとの城主は日野氏と伝えられますが、永禄年間に尼子・毛利による争奪が行われ、後に毛利・吉川氏の支配となります。尾高城の杉原盛重死後に起こった御家騒動に介入した毛利方により天正12年(1584)に落城しています。近くの大安寺には杉原盛重の供養塔があります。



【交通】バスで県道溝口伯太線の寺内停留所下車後すぐ、山頂までは徒歩約1時間。



市指定史跡

お だかじょうあと

尾高城跡 [米子城以前の西伯耆支配の拠点]

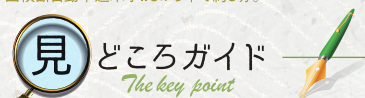
米子市尾高

交通の要地に位置する西伯耆の代表的な中世城館。尾高城は平城ですが、西側は比高差20mの河岸段丘を利用し、大山山麓に続く東側は堀と土塁で防御を固めています。北側から二の丸、本丸、中の丸、天神丸の郭が連なり、背後には越ノ前、方形館跡、南大首の郭を配しています。各郭は堀切・土塁で区画されて独立しています。もともと行(幸)松氏の居城でしたが、永禄年間に尼子・毛利の争奪戦がたびたび行われ、やがて備後国神辺から派遣された毛利方の武将杉原盛重が城主となって西伯耆支配の拠点としました。中村氏による米子城完成後に廃城となりました。



【交通】伯耆大山駅から徒歩約20分。米子駅から車で約15分。中国横断自動車道米子ICから車で約5分。

南大首郭隅櫓



【南大首郭】

発掘調査された南大首郭が整備されており、戦国期尾高城以前の在地領主の居館建物や南大首郭の隅櫓建物などが表示されていて、往時の面影を偲ぶことができます。



尾高城発掘状況



尾高城堀跡



町指定史跡

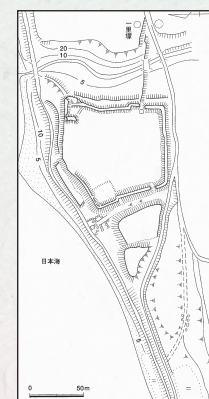
とみ ながじょうあと

富長城跡

大山町富長

[海辺に築かれた平城]

北側を日本海に面した海岸段丘に位置する単郭の平城。平面五角形を呈し、折れのある土塁が郭の周囲を巡っている。東側は河川、西側には堀切と、それぞれに土塁の切れる平入り虎口が見られます。福頼左衛門尉が居城したと伝えられていますが、富長城に関する記録は残されていません。海を意識した在地領主の城館と考えられます。

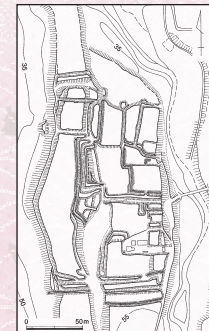


【交通】バスで国道9号の富長停留所下車後、徒歩約10分。

いわ い がきじょうあと (いわいがきじょうあと) 岩井垣城跡(石井垣城跡)

[大山北麓の拠点となる城郭] 大山町赤坂

甲川西岸の台地上に築かれた平城。東側を甲川、西側が谷に面した台地の南側を3本の堀切で区画している。主郭を始め空堀を巡らした方形区画を複数連ねた城構えとなっています。南北朝時代には糟屋氏が在城し、その後範津氏の居城となったと伝えられますが、記録は残されていません。



【交通】バスで県道羽田井植松線の潮音寺停留所下車後、徒歩約10分。

きしもと ようがい

岸本要害

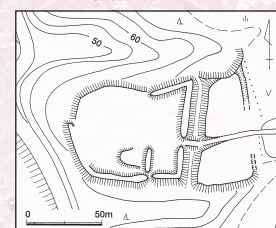
伯耆町岸本

[大山山麓に多い方形館跡]

JR岸本駅東側の比高差20mの河岸段丘にある平城。平面方形の館跡を基本とし、東西に並ぶ2郭が堀切で区画されています。西側の主郭には土塁が巡り、東側の平入り虎口前面には土橋が見られます。文献記録にはみられないため、城主等は不明ですが、大山西麓の小規模領主の城館です。



【交通】JR伯備線の岸本駅から徒歩約5分。



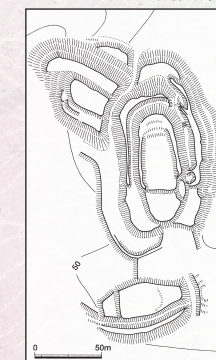
町指定史跡

こ まつじょうあと 小松城跡

南部町金田

[南北朝時代に遡る古城]

比高差30mの低い丘陵上にある保存状態の良い城館跡。主郭の北・東・西を土塁と深い空堀、さらに土塁が2重に巡っています。建武3年(1336)に、出雲国造の軍勢が伯耆に侵入して小松城を攻め、城の門前で激しい戦いがあったことが出雲千家文書に残っています。



【交通】バスで県道福頼市山伯耆大山停車場線の金田上停留所下車後すぐ。

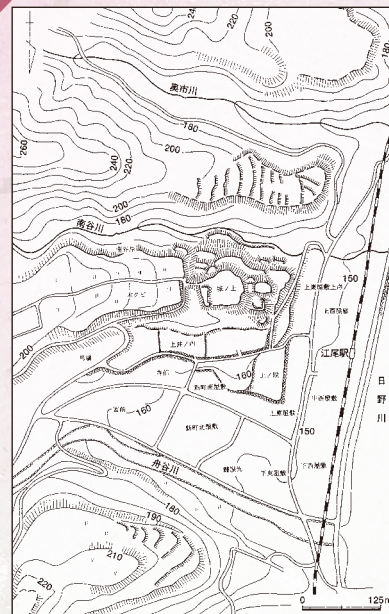


【交通】バスで県道福頼市山伯耆大山停車場線の金田上停留所下車後すぐ。

町指定史跡

えびじょうあと 江美城跡 [尼子氏に殉じた悲劇の城]

江府町江尾



JR江尾駅東側の日野川を望む台地突端にある山城。本丸（主郭）は東側に土橋を残し堀切で丘陵から切離されています。堀切に面して土塁が築かれています。城の大手は西側で、西の丸、八幡丸の郭が続ぎ、北西には枳形土塁の虎口がよく残っています。江美城は文明年間の築城と伝えられ、代々蜂塚氏が城主でしたが、永禄7年（1564）、蜂塚右衛門尉は尼子方に属していたため毛利勢に攻められて江美城は落城します。その後も日野地方を抑える要衝として重視され、江美城本丸郭は織豊期に吉川氏支配のもとに整備された姿を留めています。

【交通】JR伯備線江尾駅から徒歩約5分。
中国横断自動車道江府ICから車で約5分。



見どころガイド
The key point

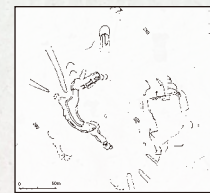


【本丸】発掘調査により石垣、石段、礎石等が発見され、金箔鯉瓦を乗せた瓦葺建物があったことがわかりました。

くろさかじょうあと（かがみやまじょうあと） 黒坂城跡（鏡山城跡）

【関一政、日野5万石の居城】 日野町黒坂

JR黒坂駅の西側にある中世から近世初頭の山城。山頂部にある山城主郭群と東側山麓部の館跡からなり、丘陵の南北には豎堀が見られます。主郭には東西に土塁が築かれ、西側には狭長な腰郭が取り付け、北側の郭には虎口がみられます。もともと中世に築かれたと思われる山城主郭群に対して、山麓部は慶長15年（1610）に関一政が5万石の大名として入城した際に枳形虎口などを整備したものと考えられます。また、近くの黒坂要害も日野氏代々の居城といわれています。



【交通】JR伯備線の黒坂駅手前、山頂まで徒歩で約30分。

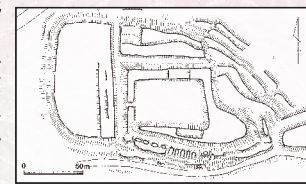
またのどいじょうあと 俣野の土居城跡

【山間部を支配した小土豪の館】 江府町俣野

日野川の支流俣野川を遡った山間地にあり、周囲を土塁で方形に囲まれた単郭の方形館跡。北側と西側は土塁の外に空堀を巡らし、堀外は広い平坦地となっています。南側と西側には特に高い土塁を築き、南西隅には土塁上に櫓台があります。西側土塁中央に平入り虎口がみられます。城主は日野山名氏とされますが、文献記録には登場しない城跡です。



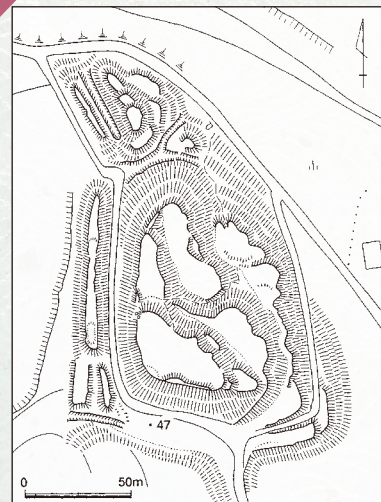
【交通】バスで県道上徳山俣野江府線の日の詰停留所下車後、徒歩約5分。



町指定史跡

ほっしょうじじょうあと 法勝寺城跡 [出雲と日野を繋ぐ要衝の城]

南部町法勝寺



法勝寺川に沿った比高差10mほどの丘陵上に築かれた平山城。堀切で北郭群と南郭群に分けられ、主郭の南郭群は土塁と切崖で防御が整えられています。東は法勝寺川が天然の堀の役目を果たし、主郭西側には堀が巡っています。五輪峠を越して日野方面、あるいは出雲国に対する防衛の要衝として、山名氏が築いたと伝えられ、文明12年（1480）には城をめぐる戦いが行われた記録があります。その後も、尼子・毛利の争奪が行われ、天正20年（1592）頃まで、西伯者の主要城郭としての位置を占めていました。



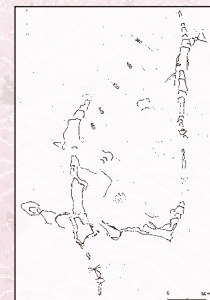
【交通】バスで国道180号の法勝寺停留所下車後、徒歩約15分。

かめい やまじょうあと 亀井山城跡

日南町生山

【日野衆の本城・日野支配の拠点】

日野川と石見川の合流点、比高差180mの丘陵頂部に築かれた山城。主郭には石垣が築かれ、北、東・西側に取り付け腰郭にも同様の石垣状の石積が見られます。尾根筋には郭が連続と築かれており、南側は堀切で区画されています。亀井山城は黒坂城と並ぶ日野衆の拠点となった城と考えられます。日野地方の支配を目指す尼子・毛利氏によって重視され、天正20年（1592）の記録にある「日野」は亀井山城のことと考えられ、主郭部周辺の石垣は吉川氏により整備されたものと思われます。



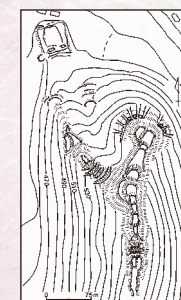
【交通】JR伯備線の生山駅すぐ、山頂まで徒歩で約60分。

ゆだにじょうあと 湯谷城跡

日南町湯河

【国境を守った根小屋式山城】

出雲・備後との国境にも近い日野川上流の山間部にある山城。比高差130mの山頂部に築かれた郭群は丘陵の尾根筋に郭を連続して築いています。主郭の北側斜面部には連続する豎堀があり、こうした畝状豎堀が見られるのは伯耆では湯谷城跡だけです。西側と南側には複数の堀切がみられ、最高部の郭には櫓台もあります。また、山裾には土塁・堀切を備えた居館跡がみられる典型的な根小屋式山城です。



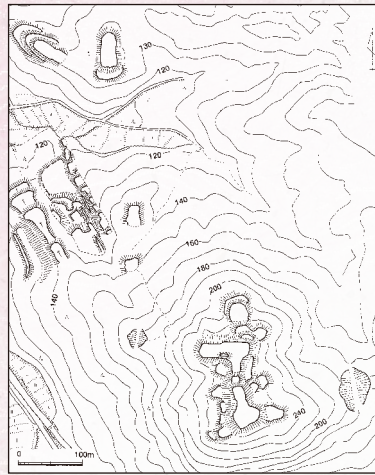
【交通】バスで国道183号の多里支館入口停留所下車後すぐ、山頂まで徒歩約30分。

いわくらじょうあと

岩倉城跡 [伯耆山名氏を支えた有力国人小鴨氏の城]

倉吉市岩倉

倉吉市の南部、小鴨川支流の岩倉川東岸の標高247mの丘陵上に位置します。平安末期から続く有力国人の小鴨氏の居城とされていますが、築城時期は不明です。小鴨氏は南条氏と関係が深く、南条氏の毛利離反の際には同調し、共に戦い、天正10年(1582)の羽衣石城の落城と相前後して、岩倉城も落城したと伝えられています。山頂部と北西側の山麓部に曲輪が集中しており、山頂部に主郭を配し、周囲に腰郭を設け、北西側の山麓部は北側に開口する谷を中心に曲輪を配しています。



【交通】バスで広瀬線の岩倉停留所下車。徒歩10分。麓から本丸まで約20分。

町指定史跡

かわぐちじょうあと

河口城跡

湯梨浜町園

[水陸交通の要衝に位置する城]

JR泊駅の裏にある標高80mほどの丘陵斜面に位置し日本海が望めます。その立地から水陸両方の交通の要衝であり、代々山名一族が居城していました。毛利氏の因幡侵攻時の拠点であり、羽柴秀吉の鳥取城攻めの時は、毛利方の救援の拠点として武器・兵糧の集積地でした。



吉田浅雄1998より転載



【交通】JR山陰線の泊駅から徒歩約20分。

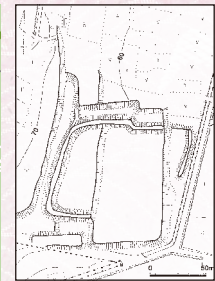
いちばじょうあと

市場城跡

倉吉市小鴨

[小鴨氏関連の大型居館跡]

倉吉市の南部、小鴨地区の標高70mほどの丘陵裾部に位置し、小鴨氏の家臣岡田某の居城とされています。築造時期等の詳細は不明です。土塁や空堀の残りが大変良好で、堀の深さは3〜4mもあります。いわゆる方形居館といわれるもので、全国的に見ても規模が大きく、注目される城館跡です。



【交通】バスで関金山口線の市場停留所下車後、徒歩約10分。

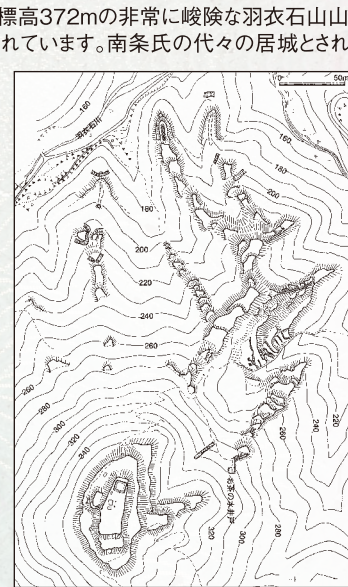
県指定史跡

うえしじょうあと

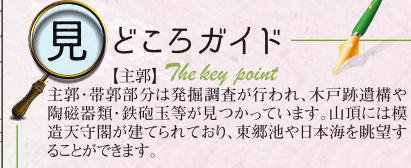
羽衣石城跡 [伯耆山名氏を支えた有力国人南条氏の城]

湯梨浜町羽衣石

東郷池の南、標高372mの非常に峻険な羽衣石山山頂を中心に築かれています。南条氏の代々の居城とされており、貞治5年(1366)南条貞宗によって築城されたと伝えられています。文献記録に数多く登場する城で、尼子氏や毛利氏の激戦の舞台となり、関ヶ原の戦後に南条氏の改易と共に廃城となりました。羽衣石山も「羽衣伝説」の舞台で、天女が羽衣を置いたとされる石から地名がつけられたとされています。



【交通】JR山陰線の松崎駅からタクシーで約20分。無料駐車場から本丸まで山道を約40分。



町指定史跡

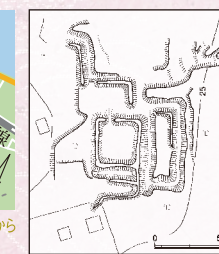
槻下豪族居館跡

[謎の居館跡] 琴浦町槻下

鎌倉時代に岩野弾正の居城であったとされますが、築造時期等も含めて詳細は不明です。平地に立地し、堀や土塁、虎口等の遺構の残りが大変良好で、いわゆる方形居館といわれるものです。周囲には平地が広がり、目立った城館もなく、これほどの館跡がなぜ存在するのか謎の城館跡です。



【交通】JR山陰線の浦安駅から徒歩約30分。



町指定史跡

八橋城跡

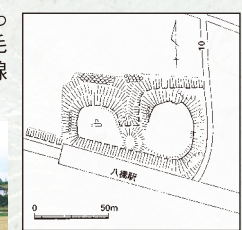
琴浦町八橋

[攻防を繰り返した居城]

JR八橋駅に接する丘陵西側に位置します。室町時代に行(幸)松氏が築城して以来、合戦の舞台として数多く文献に登場します。特に毛利氏の支配下では、伯耆経営の拠点として重視されており、南条氏と小鴨氏が織田方に寝返ってからは、織田と毛利の戦いの最前線となりました。



【交通】JR山陰線の八橋駅から徒歩約5分。



因幡山名氏の 栄枯盛衰

因幡の城をめぐる攻防

中世の因幡国は、室町時代以降、守護職を継承した山名氏一族内部の争い、そして尼子・毛利・織田といった因幡国外の勢力による抗争の歴史です。

鎌倉時代の城館の様相は明確ではありませんが、地頭などに任じられた有力武士が館などを構えていたことが推測されます。そのような有力武士の一人であった伯耆の名和長年は、元弘3年(1333)の後醍醐天皇の隠岐脱出に呼応して鎌倉幕府に反旗を翻し、建武の新政のもとで因伯両国の守護となりますが、足利尊氏に従っていた山名時氏が名和氏を破り、新たに因伯両国の守護となりました。時氏は一時期南朝に属することもあったが、後に因伯を氏はじめとする5ヶ国の守護職に任じられることを条件に足利氏と和睦しています。その後、因幡守護職は山名氏が代々継承していきます。

出雲においては守護代であった尼子氏が支配を確立して有力な戦国大名へと成長していき、伯耆、因幡へも尼子氏の影が忍び寄っていきました。天文13年(1544)には尼子勢が因幡に侵入し、鹿野城が攻撃される事態も発生しています。一方では但馬の山名氏も因幡支配を目論んでおり、天文17年(1548)には因幡山名氏の本拠であった天神山城が奇襲され、守護の山名誠通が討ち死にする事態も起こっています。

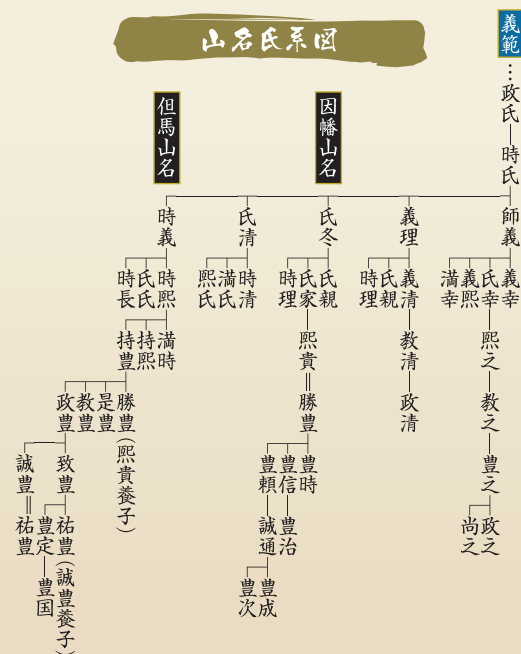
因幡国内においては、重臣である武田高信が守護の山名豊国を凌ぐ勢力を持つようになり、武田派と守護派が生じる有様でした。山名豊国は謀をもって武田高信を倒すことには成功しましたが、守護の權威は大きく失墜しました。

永禄9年(1566)には山陰に勢力を誇った尼子氏の居城であった月山富田城が落城し、因幡にも中国地方最大の戦国大名に成長した毛利氏の勢力が及び始めます。一方、全国統一を目指す織田勢は羽柴秀吉を大将として2度にわたり鳥取城攻めを行い、その結果、因幡から毛利氏の勢力が駆逐され、織田方の武将が要衝の城に配されることになりました。

山名氏一族の歴史

山名氏は、清和源氏新田氏に連なるとされる名門ですが、鎌倉時代には足利氏の配下となっていたようで、歴史の表舞台には登場しません。しかし、南北朝期に生きた山名時氏は一時南朝に属するなど足利氏と対立しましたが有利な条件で足利氏と和議を結び、山名氏隆盛の基礎を築きました。その後、山名氏は幕府内で四職家の一つとして重きをするとともに、一族で因幡守護をはじめとする中国一門の11ヶ国の守護を占め「六分の一殿」と呼ばれるほどの権勢を誇りました。しかし、山名氏一族内部での争いに端を発した明德2年(1391)の明德の乱によって一族で3ヶ国の守護へと大きく勢力を減らしますが、後には再び勢力を盛り返し、文正2年(1467)の応仁の乱では山名持豊(宗全)が一方の総大将を務めるほどでした。しかし、他の多くの守護大名と同じく有力な戦国大名とはならず、歴史の表舞台から消えていきました。

山名氏系図



因幡の城をめぐる攻防



わか さ おに がじょうあと
若桜鬼ヶ城跡 [但馬・播磨への主要交通路を握る山城]

若桜町若桜ほか

国指定史跡

難攻不落の巨大山城

若桜鬼ヶ城は若桜の町を眼下に望む標高452mの鶴尾山の山頂部から丘陵尾根上に郭群を配しています。築城は南北朝期に遡るとされ、後に木下山崎両氏の手で大規模に整備された織豊期城郭の姿を良く残しています。若桜鬼ヶ城は矢部氏によって築かれ、16代にわたる若桜統治の拠点であったといわれていますが、因幡から但馬・播磨に抜ける主要交通路を押さえる要衝の地であるため、戦国時代の天正3年(1575)尼子氏の支配下となります。後には羽柴秀吉の配下である木下備中守が若桜二万石の城主となり、慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いで破れるまで22年間若桜を統治しました。

関ヶ原の戦い後には山崎家盛が入城しましたが、元和3年(1617)の池田光政の鳥取移封に関連して山崎氏は備中国成羽に転封となり、若桜鬼ヶ城は池田氏の統治下にはいりましたが、一国一城令に基づき廃城となりました。

見 ところガイド
The key point

【主郭部】
本丸、二の丸、三の丸、ホウツギ段、六角石垣などの郭が残り、廃城時に破却された際の石垣が残されています。



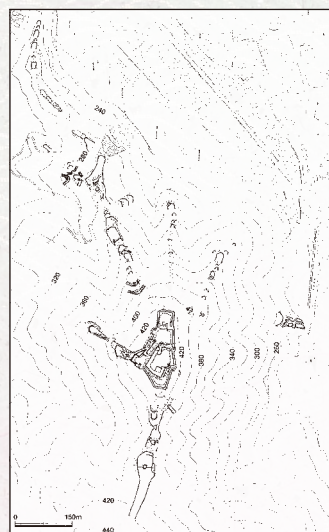
国重要文化財矢部家住宅



若桜鬼ヶ城主であった矢部氏は、天正年間に尼子氏の攻撃を受けて滅びたといわれますが、子孫は八頭町用呂に上着し、江戸時代には代々大庄屋を務めました。
主屋は承応～元禄頃の建築と考えられており、昭和49年2月に国の重要文化財に指定されました。



【交通】若桜鉄道の若桜駅から徒歩約1時間、車の場合若桜駅から城山林道経由で山頂駐車場まで約15分。無料駐車場から本丸まで徒歩約15分。



きさ いちじょうあと
私都城跡 [守護山名氏と対立した国人毛利氏の本拠]

八頭町市場

私都城は八頭町市場に存在します。標高260m、比高差120mの山頂及び尾根筋に数多くの郭が設けられ、随所に堀切が配されています。

築城の詳細は明確ではありませんが、国人の毛利氏の拠点であり、私都郷一帯を支配下に置くとともに、守護である山名氏ともたびたび対立したといわれています。

天正9年(1581)羽柴秀吉の鳥取城攻めに際して落城したと伝えられています。



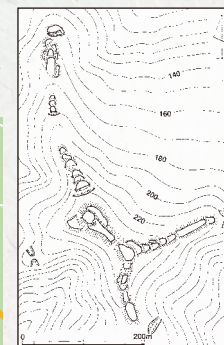
【交通】バスで県道麻生国府線の市場停留所下車。麓から本丸まで約1時間。

たかひらじょうあと
隆平城跡 八頭町日下部

[若桜谷の要衝を握った波多野氏の拠点]

隆平城は八頭町下日下部にあり、若桜谷に張り出す標高298mの「城山」頂部に位置し、郭や土橋・堀切を配しています。鳥取から若桜へ至る交通路を押さえていたと考えられます。城主は波多野氏であったと伝えられていますが、築城時期は明らかになっていません。

伝説によれば、永禄2年(1559)隆平城主であった波多野氏部大輔は同じ若桜谷にある鷹の山城主の丹比氏に川での漁に誘われて出かけたところ、欺かれて攻められ自害したと伝えられています。



【交通】若桜鉄道の安部駅から徒歩約20分。麓から本丸まで約1時間。

ふ き だにじょうあと
富貴谷城跡

[秀吉配下の武将が守った] 智頭町坂原

富貴谷城は因幡から美作へ抜ける上で重要な要衝の地である智頭の集落を眼下に望む通称「城山」にあり、頂部に主郭、尾根上に郭と堀切を配しています。

羽柴秀吉の鳥取城攻めの際には秀吉配下の隠岐土佐守に守らせたといわれています。隠岐氏は智頭に勢力をもっていた草刈氏の夜討ちのため倒れ、城も廃城となったといわれています。



【交通】JR因美線の智頭駅から徒歩約15分。麓から本丸まで約40分。

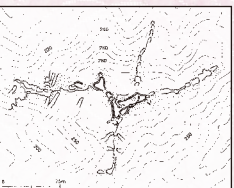
因幡の城をめぐる攻防

かげいしじょうあと
景石城跡 鳥取市用瀬町用瀬

[智頭谷・佐治谷に睨みをきかす]

景石城は鳥取市用瀬の東端にある標高325mの「お城山」の山上に位置し、頂部には2段の郭からなる主郭部、尾根上には連続する郭群があります。西側に面した部分のみですが石垣も存在しています。

長く因幡守護山名氏の勢力下にあったと考えられますが、天正8年(1580)の羽柴秀吉の鳥取城攻めの際に秀吉配下の磯部氏が入城しています。一時的に毛利方が城を奪い返すこともありましたが再び磯部氏が入城し、関ヶ原の戦いで敗れるまで城を守ったと伝えられています。



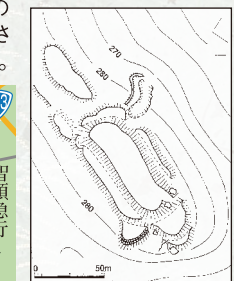
【交通】JR因美線の用瀬駅から徒歩約15分。麓から本丸まで約1時間。

からびつじょうあと
唐櫃城跡 智頭町木原

[美作から因幡を狙った橋頭堡]

唐櫃城は木原集落近くの標高約300mの尾根頂部に位置します。主郭の南東には虎口があり、南側の郭には石積みがあります。

応仁期(1467～69)以降に美作から因幡へ勢力を伸ばした木原氏の居城と伝えられており、近隣に勢力を誇ったといえます。その後、毛利氏の命を受けた美作の草刈氏によって滅ぼされたといわれています。



【交通】JR因美線の土師駅から徒歩約30分。麓から本丸まで約40分。

県指定史跡

ふたがみやまじょうあと

二上山城跡 [山名時氏の築城と伝えられる]

岩美町岩常

南北朝期の 特徴を持つ山城

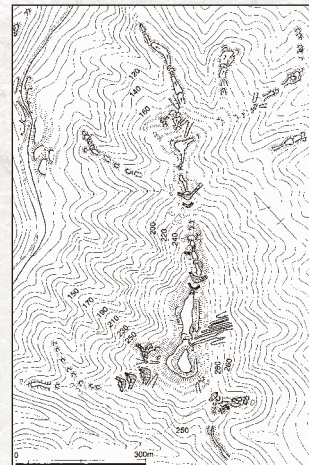
蒲生川の支流である小田川の中流域を望む標高346mの二上山頂上部に位置しています。

この城は、山名氏隆盛の基礎を築いた山名時氏が、暦応3年(1340、南朝暦の興国元年)に因幡守護職に任じられたことから、因幡支配の拠点とされるべく文和年間(1352～55)に築城したと伝えられており、構造的にも南北朝期の特徴を残しています。

文正元年(1466)に山名勝豊が天神山城に移るまで山名氏の因幡支配の拠点であり、慶長5年(1600)に廃城したと伝えられています。



【交通】バスで県道岩美八東線の高住橋停留所下車後、徒歩約30分。麓から本丸まで約1時間。二上山登山口駐車場あり。



見どころガイド The key point

【主郭周辺】

「一の平」「二の平」と呼ばれる2つの主郭を中心に多くの郭群が山中に点在し、北・東・南の尾根は堀切で切断され、東側の斜面には畝状堅堀が認められます。山頂からの眺望は素晴らしい。

きりやまじょうあと

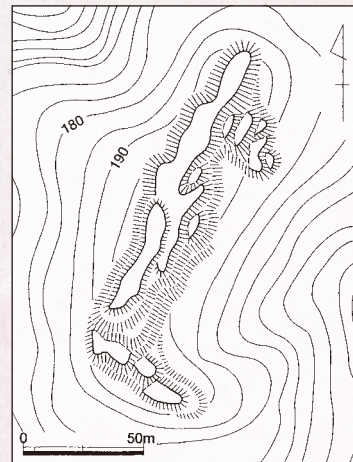
桐山城跡 [山中鹿之助が立て籠もる]

岩美町浦富

山中鹿之助の本拠となった山城

標高203mの独立丘陵である紀伊ヶ山頂上部に細長く郭が存在します。

桐山城の築城時期は明確ではありませんが、『因幡志』によれば室町時代初期に出雲守護であった塩冶高貞が築城したとされています。後には山中鹿之助がこの城を本拠としたこともあったといわれています。天正9年(1581)の羽柴秀吉の鳥取城攻めの後には秀吉配下の垣屋播磨守光成が入城し、巨濃郡で1万石を与えられています。



【交通】バスで県道網代港線の岩本停留所下車後、徒歩約1時間。

県指定史跡

てんじんやまじょうあと

天神山城跡 [中世因幡山名氏の拠点]

鳥取市湖山

湖山池に臨み街道を押さえる

因幡においては、山名時氏が築いた二上山城が永らく因幡支配の拠点でしたが、文正元年(1466)に山名勝豊(但馬山名氏から因幡山名氏に養子に入る。応仁の乱で西軍を指揮した山名持豊(法名宗全)の子)が天神山城を築いて守護所を移し、その後100年余りにわたる因幡支配の拠点となりましたが、鳥取城に本拠が移されたことにより天神山城は廃城となりました。

天神山城は山名氏の因幡支配の本拠であったために数多くの出城が存在し、山名氏を支えた重臣たちがそれぞれの出城を守っていました。主なものには、徳吉城(徳吉将監)、秋里城(秋里玄蕃允)、鶴尾城・鳥取城(武田高信)、新山城(中村伊豆守)などがありました。



【交通】JR山陰線の鳥取大学前駅から徒歩で約10分。

天神山城とは

残されている絵図から、高さ15m、南北約100mの独立丘陵である天神山山頂に3層の天守櫓が建てられていたことが分かります。天神山を取り巻いて内堀が掘られて湖山池の湖水が導入されており、外堀は総延長約2.6kmにも及ぶものでした。現在では井戸・櫓跡や濠の跡などがわずかに残っています。発掘調査によって、土器・中国製の陶磁器・古銭・下駄・曲物などが見つかりました。



天神山城絵図
(鳥取県立博物館提供)



つづら おじょうあと
防己尾城跡 [秀吉軍と戦った智将の城]

鳥取市金沢ほか

湖山池に突き出た天然の要害



湖山池西岸に位置し、北・東・南の三方が断崖となって湖山池に面しています。それほど急峻な山ではないですが、湖山池西岸の地形を巧みに取り入れており、堅固な城構えといえます。

湖山池を挟んだ対岸に位置している因幡守護山名氏の拠点である天神山城の出城の1つであり、吉岡将監が築城したと伝えられています。

天正9年(1581)の羽柴秀吉の鳥取城攻めの際には吉岡氏は毛利氏に従って籠城して秀吉勢と対峙し、しばしば鳥取城を包囲する秀吉勢の背後を脅かしました。一時は秀吉の千成瓢箪の馬印を奪うなど善戦したが、鹿野城番であった亀井茲矩に包囲されて兵糧が尽き、ついに落城したといわれています。

見 どころガイド
The key point

【湖山池公園】
防己尾城は湖山池公園の休養ゾーンとなっており、本丸・三の丸は整備されています。本丸から望む湖山池も趣があります。



【交通】バスで県道金沢伏野線のつづらお停留所下車すぐ。無料駐車場あり。

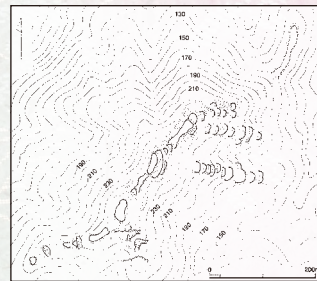


ひよどりお じょうあと
鴨尾城跡 [武田氏の拠点]

鳥取市玉津

天神山城の出城の1つで、丘陵頂部に連続した多数の郭や堀切が存在しています。天文頃(1530年代)の築城といわれており、山名氏の重臣であった武田氏の本拠ですが、城主の武田高信は鳥取城に常駐したといわれています。

武田高信は、主家である山名氏の力が衰えたのを見て下剋上の動きを見せますが、山中鹿之助の助力を得た山名豊国に破れ、誅殺されました。



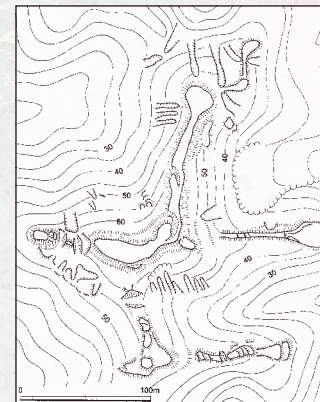
【交通】バスで県道鳥取河原線の倭文停留所下車後、徒歩約1時間。

かつやまじょうあと
勝山城跡 [因幡における尼子氏の拠点]

鳥取市気高町勝見

JR浜村駅南の独立丘陵上に位置し、山頂に主郭を置き、派生する尾根には郭や堀切を配しています。

城主は首藤氏であったといわれていますが、永禄年間(1558~70)には尼子氏の武将である尼子豊後守正久が首藤氏に変わって城主となりました。後には、羽柴秀吉の命を受けた亀井茲矩が謀を持って城を奪ったといわれています。



【交通】JR山陰線の浜村駅から徒歩で約20分。

市指定史跡

しかの じょうあと
鹿野城跡 [飛躍を果たした亀井氏の居城]

鳥取市鹿野町殿町ほか

津和野藩主へと
至る亀井氏の道のり

鹿野城は因幡山名氏配下の志加奴氏の居城であり、天文12年(1543)の尼子勢の因幡侵入に際しては鹿野城が争奪の舞台になったといわれています。後には毛利勢が城を奪い、城中に守護山名豊国の息女や重臣の一族を人質として閉じこめていたこともありまし

た。天正8年(1580)及び翌9年の羽柴秀吉による2度の鳥取城攻めを経て、鹿野城は亀井茲矩に与えられることになります。亀井氏は領国支配に腐心し、城下町の整備などを行いますが、元和3年(1617)石州津和野に転封となり、一国一城令により城は破壊されてしまいました。現在は桜の名所となっています。



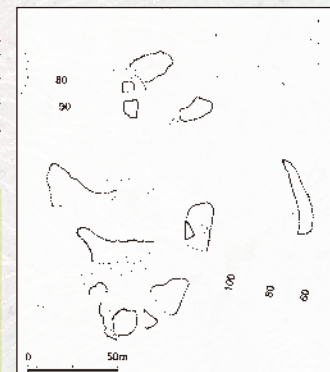
【交通】鹿野中学校脇に無料駐車場あり。麓から本丸まで徒歩で約10分。

見 どころガイド
The key point

現在も城跡の周辺には、城下町の名残を見ることが出来ます。

鹿野城の櫓

鹿野城には亀井茲矩が建てた「オランダ櫓」・「朝鮮櫓」などの他城にはない名称の櫓がありました。これらの建物は何も残っていませんが、朱印船貿易によって財を蓄えたことに由来するのでしょうか。



近世城郭と幕末の台場

江戸幕府成立後、新たに成立した藩ごとに政治・経済の中心として城郭等が築かれ、城下町が形成されました。近世の城郭は総石垣で築かれ、今も天守閣が残る出雲国の松江城の他、石見国の浜田城(5巻参照)、津和野城、因幡・伯耆国では鳥取城、米子城を残して多くの城は廃城となりました。また、幕末になり、近海に異国船が頻繁に現れるようになると、海防のため日本海沿岸には台場が築かれました。

国指定史跡

まつ え じょう

松江城 [堀尾・京極・松平氏の居城]

松江市殿町



松江城天守

全国に現存する12天守の一つで山陰では唯一の天守です。天守の大きさ(平面規模)では2番目、高さ(約30m)では3番目、古さでは5番目です。(文化庁データベース)

関ヶ原の合戦の戦功により出雲・隠岐24万石の領主となった堀尾忠氏が早世した為、父の堀尾吉晴が孫の2代藩主忠晴を補佐して5年の歳月をかけ、慶長16年(1611)に完成させました。藩主は堀尾氏2代、京極氏1代の後、松平氏が10代234年間にわたって18万6千石を領しました。

明治8年、城内の建物とはりこわされましたが天守だけは地元の有志の奔走によって保存され、昭和25年～30年の解体修理を経て現在に至っています。

松江城は平山城で、天守がある本丸とその北側にある北之丸、周辺に二之丸、外曲輪(二之丸下ノ段)、後曲輪がめぐり、南には堀を挟んで三之丸があります。

天守は、附櫓を設けた複合式望楼型で、四重五階(地下一階附)です。一、二重目は大入母屋屋根で全面下見板張り、望楼部と附櫓も一部白漆喰ですが窓廻りの木部は黒塗りで、黒と白のコントラストが美しい城です。

さらに、二之丸には復元された三棟の櫓がおかれ、また、城下の塩見縄手には江戸時代の城下町の町並みが良く残っています。【交通】JR松江駅から車で約10分。山陰道松江ICから車で約10分(駐車場あり)。

天守が国宝指定に!

天守は昭和10年に国宝保存法により国宝に指定され、昭和25年には文化財保護法の制定により重要文化財となりましたが、国宝指定を望む市民・関係者等により活動が続けられてきました。

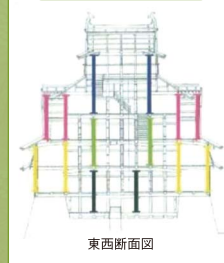
そして、その後の調査研究等により、次のことが新たに分かりました。

①平成24年5月に、「慶長十六年」と記された祈禱札2枚が再発見され、その後の研究により、天守が慶長16年(1611)完成であることが明確になった。

②2階分の通し柱や包板の技法を用いた特徴的な柱構造が解明され、天守建築に優れた技法を用いた事例であることが判明した。(右図参照)

これらのことから、彦根城(慶長11年)、姫路城天守(慶長13年)と肩を並べる存在であるとして、平成27年7月8日、国宝に指定されました。

松江城天守通し柱配置図



東西断面図

近世城郭と幕末の台場

国指定史跡

とっとりはんたい ばあと
鳥取藩台場跡

[幕末動乱の歴史を伝える砲台]

由良台場跡

北栄町

淀江台場跡

米子市

浦富台場跡

岩美町

境台場跡

境港市

橋津台場跡

湯梨浜町

赤崎台場跡

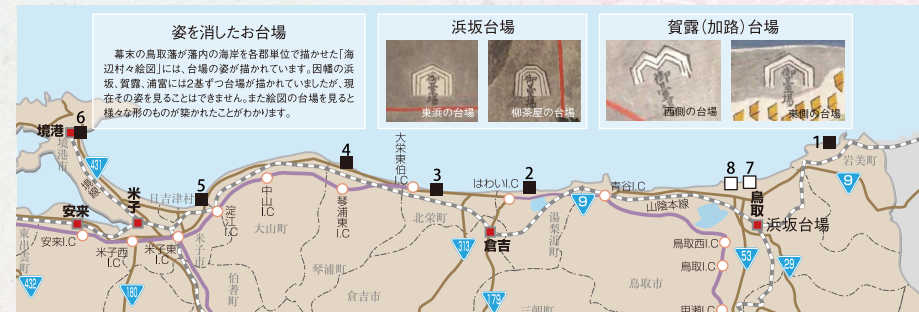
琴浦町



由良台場跡

江戸末期、黒船来航以来諸外国との緊張が高まる中、鳥取藩は領内因幡・伯耆2国の海岸線東西160km(40里)の内、因幡国では浦留(富)、浜坂、賀露の3ヶ所に、伯耆国では橋津(長瀬)、赤崎、由良、淀江(今津)、境の5ヶ所に沿岸警備のために、西洋式の城塞プランを取り入れた台場(砲台)を築造しました。特に由良台場跡は、当時のままの姿をほぼ完全に残しています。

現存する浦富、橋津、由良、淀江、境、赤崎の台場跡は国史跡に指定されており、幕末の動乱の歴史を今に伝えています。



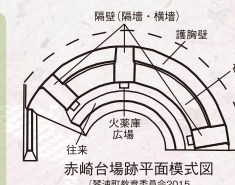
姿を消したお台場
幕末の鳥取藩が藩内の海岸を各都単位で描かせた「海辺村々絵図」には、台場の姿が描かれています。因幡の浜坂、賀露、浦富には2基ずつ台場が描かれていますが、現在その姿を見ることはできません。また絵図の台場を見ると様々な形のものが築かれたことがわかります。

浜坂台場
東側の台場
仙菜屋の台場

賀露(加路)台場
西側の台場
赤崎の台場

1. 浦富台場
2. 橋津台場
3. 由良台場
4. 赤崎台場
5. 淀江台場
6. 境台場
7. 浜坂台場
8. 賀露台場

■ 現存する台場
□ 消滅した台場



赤崎台場跡平面模式図
琴浦町教育委員会2015
「赤崎台場跡発掘調査報告書」から

【お台場用語】

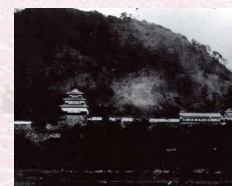
隔壁・・・砲壇、護胸壁を区画した土塁で火薬庫を砲撃から守る構造となっている。
護胸壁・・・敵の砲弾を防ぐ壁面。
砲壇・・・護胸壁の内側にあり、大砲を据えた場所。
火薬庫・・・大砲に供給する火薬を収めた半地下式の場所。
往來・・・兵士たちが行き来するための段。

国指定史跡

とっとりじょうあと
鳥取城跡

鳥取市東町ほか

[中世城郭と近世城郭からなる“城郭の博物館”]



戦国時代、「日本にかくれなき名山」に築かれた山城として知られた鳥取城跡。歴史的に著名な羽柴秀吉の兵糧攻めは、鳥取城を「堅固な名城」と称した織田信長の直接指示によるものです。江戸時代には国内十数番目の規模を誇る鳥取藩32万石の池田家の居城となりました。そのため、それ一つで日本城郭の形態変化を物語る「城郭の博物館」とも称されています。

【交通】JR鳥取駅から徒歩約30分。麓から山頂まで徒歩で約1時間。

国指定史跡

よなごじょうあと
米子城跡

米子市久米町ほか

[5層の天守が聳える山陰随一の名城]

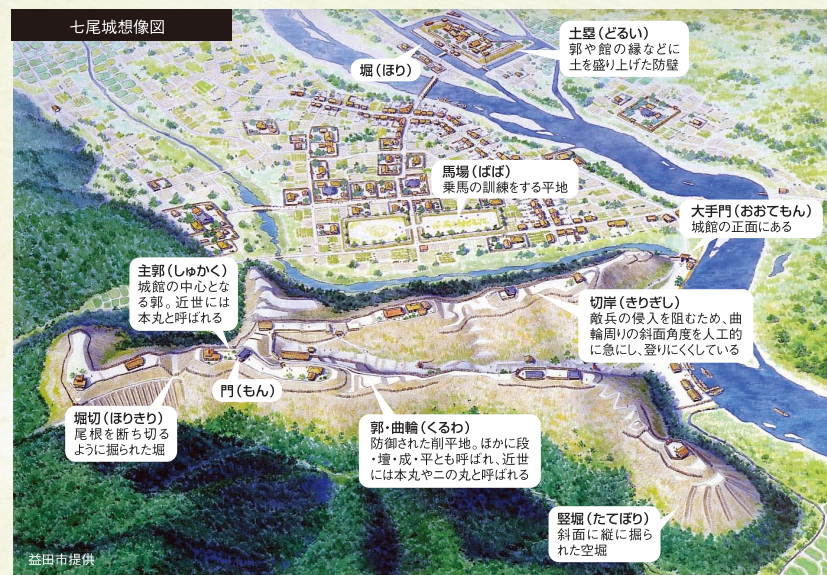


米子市街地の西側、中海に突き出た湊山と、飯山に築かれた戦国時代末期から近世の平山城。文献・絵図資料が良好に伝えられており、城郭構造をよく知ることができます。湊山頂上に総石

垣の本丸があり、往時は5層の天守、4層の副天守を備えた山陰随一の城郭でした。本丸から遠く大山、弓ヶ浜半島、日本海、眼下に市街地を収めた見事な眺望は、米子城の大きな魅力の一つとなっています。

【交通】JR米子駅から徒歩約30分。麓から山頂まで徒歩で約15分。登山口脇に無料駐車場あり。

城館用語解説



石垣 (いしがき)

戦国時代の中頃から、土塁や切岸に変わって石垣が使われるようになりました。初めは自然石を積み上げた野面積み(のづらづみ)でしたが、1600年代終わりごろになると切石積に発展していきました。



櫓台 (やぐらだい)

櫓(矢倉)は中世の武士の館の門の上に造られたのが始まりで、後に土塁や石垣の上にも造られるようになりました。櫓台は櫓を設置できるように土塁や石垣の上を拡張したところです。



その他の用語

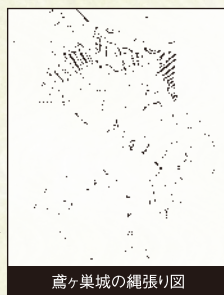
虎口 (こぐち)

城門に造られた防御施設です。平入り虎口・くい違い虎口・枡形虎口などの種類があり、順に防御度が高くなっています。



縄張り (なわばり)

城館全体の平面構成を縄張りといいます。中世の城館では、堀切や土塁といった土木工事によって城が築造されたため、縄張りが重要となりました。



参考文献

1. 児玉幸多・坪井清足編『日本城郭大系14 鳥取・島根・山口』1980 新人物往来社
2. 眞田廣幸「第7章 倉吉の城館跡」『新編 倉吉市史』第2巻 中・近世編 1995 倉吉市
3. 吉田浅雄「伯耆山名一族の城館遺跡」『山名』第4号 1998 山名史料調査会
4. 千田嘉博・小島道裕・前川要『城館調査ハンドブック』1993 新人物往来社
5. 鳥根県教育委員会『石見の城館跡』1997
6. 鳥根県教育委員会『出雲・隠岐の城館跡』1998
7. 鳥根県中近世城館研究会『尼子十旗』1998
8. 藤岡大拙監修『鳥根県歴史大年表』2001 郷土出版社
9. 鳥取県教育委員会『鳥取県中世城館分布調査報告書第1集(因幡編)』2002
10. 鳥取県教育委員会『鳥取県中世城館分布調査報告書第2集(伯耆編)』2004
11. 鳥取県教育委員会編『中世城館シンポジウム 東伯耆の中世城館資料集』2005
12. 井上寛司・山根正明・西尾克己・稲田信編『戦国武将宍道氏とその居城』2005 宍道町21世紀プラン実行委員会
13. 高屋茂男編『出雲の山城－山城50選と発掘された城館－』2013

※このほか、発掘調査が行われている城館については、各発掘調査報告書を参考にしました。

資料提供および協力機関(五十音順)

島根県

海士町教育委員会、飯南町教育委員会、出雲市文化財課、雲南市教育委員会、大田市教育委員会、邑南町教育委員会、隠岐の島町教育委員会、奥出雲町教育委員会、川本町教育委員会、江津市教育委員会、津和野町教育委員会、浜田市教育委員会、広瀬洞光寺、益田市教育委員会、松江市まちづくり文化財課、美郷町教育委員会、安来市教育委員会

鳥取県

岩美町教育委員会、江府町教育委員会、琴浦町教育委員会、大山町観光課文化財室、智頭町教育委員会、鳥取県立博物館、鳥取市教育委員会、南部町教育委員会、伯耆町教育委員会、八頭町教育委員会、湯梨浜町教育委員会、米子市経済部文化観光局文化振興課、若桜町教育委員会

初版 平成18年(2006年)3月刊行
改訂版 平成28年(2016年)3月, 平成30年(2018年)3月, 令和3年(2021年)1月刊行